Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

中国人研修生と受入側日本人の生活と文化変容(3)

浅野, 慎一

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,2(2):285-315

(Issue Date)
1995

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000191

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000191

神戸大学発達科学部研究紀要
第2巻第2号　1995

中国人研修生と受入側日本人の生活と文化変容（3）

浅　野　慎　一*

Chinese Trainees and Host Japanese:Their Life and Acculturation(Part. 3)

Shinichi ASANO

第4章　研修生の生活過程と問題

さて次に、研修生の生活過程とそこでの諸矛盾について見ていこう。

第1節　経済生活の実態と問題

まず、最も大きな問題は、経済問題である（表4－1）。

第1項　企業研修生の研修－生活費

企業研修では、研修費として月75000円（食費25000円、雑費50000円）が手渡され、それ以外に、自炊施設付きの宿舎、及び、水光熱費・暖房費、国民健康保険と民間傷害保険の保険料を企業が負担している。また、日本語研修や各種レセプション、渡航費等も企業の負担である。通勤費等、その他

表4－1　研修費と使用費目　（千円）

		来日前職業	研修手当手渡	食費	日用品衣類手紙交通費	娯楽費	貯金	手当に対する意見 十分	少し不足	全く不足	足りない理由	日本は外国人労働者をもっと受け入れるべきか
企業	①技術者		75	30	10～20		30～40		○		生活費（物価）・土産代・遊び・食事・買物	○
	②技術者		75	25	10～20	10	30～40		○		貯金・土産代・研修資料代・娯楽交際費	○
	③技術者		75	20～25	10	15	25～30			△	(研修ならいいが、労働だから不十分)	×
	④個人企業主		75	22	12	土産10	33		○		物価高	△
	⑤個人企業主		75	30	1	5	35			○	貯金・本代	△
	⑥管理者		75	25	20		30	○				×
	⑦管理者		75	25	20		30	○				×
	⑧管理者		75	25	10	15	25		○		物価高・土産代・貯金	△
	⑨管理者		75	25	5～10	10～15	30		○			△
	⑩管理者		75	30	5	40	なし		○		研修見学費用	×
農業	①自営農民		20				20	○				○
	②自営農民		20		1		19					×
	③農業技術者		20	20	2		なし		○		生活費（物価）	△
	④農業技術者		20				20		○			△
	⑤農業技術者		20	10			10			○	生活費（物価）	×
	⑥農業技術者		15		1		14	○				△
	⑦農業技術者		15		1		14		○			△
	⑧農業技術者		15						○		土産物	○
	⑨農業技術者		10				10		○			×
	⑩その他		20		5		15			○	貯金	×
	⑪その他		15		15		なし			○	生活費（物価）	△
	⑫その他		15		8		7			△	(研修ならいいが、労働だから不十分)	×

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースNOは表毎に不統一。

＊神戸大学発達科学部社会環境論講座

の費用負担は企業毎に違いがある。総じて、研修生受け入れに伴う費用は、何を受け入れ費用と考えるかによって、企業毎にかなりばらつきがあり、研修費を含めて月額10万~40万円となっている。

しかし、いずれにせよ、企業研修生が手にする研修費は月額75000円である。彼らは、この中から、食費に約25000円、衣類や交通通信、書籍や文具等を含む日用品に約10000~20000円、娯楽交際費に約10000~15000円を支出し、そして毎月約30000円前後を貯金している。なお企業研修生は、帰国後120000円を中国の派遣機関に納入することを義務づけられている。そこで彼らの貯金のうち、毎月10000円分はこれに備えるものであり、彼ら自身の貯金として残るのは、毎月約20000円前後である。

第２項　農業研修生の研修－生活費

農業研修の研修費は、農家によって支払方法に違いがあるが、総じて研修生に手渡しで15000~20000円、受入機関に積立で30000~35000円、合計50000円である（表４－２）。ただし、農家に同居して研修するので、家賃・水光熱費・食費は農家負担であり、また来日・帰国旅費や健康保険費を含む受入機関の管理事務費も農家が負担している。その他に、農家によっては、小遣いや作業着・研修旅費・医療費・餞別等を負担している場合もある[1]。

そこで、農業研修生が自ら支出するのは、手紙や日用品の数千円だけであり、彼らは、残額をすべて貯金に回している。農家側から言えば「研修生に負担させるのは手紙代位で、年間2000円程」であり、また農業研修生側から見ても「生活用品は言えば牧場主がくれるから、自分で使うのは手紙代位。お金は殆どたまっている」「自分で使うのは手紙代位。切手が800円、日用品は買っても500~800円。それ以外に使うこともないし、殆ど全部貯金する」という実態である[2]。

表４－２　農家経済負担　（千円）

	研修手当	積立金	管理費	食費その他	研修生調査
①	20	30	15	食費15・来日帰国旅費	20
②	20	30	10	食費その他で60。月額合計120	20
③	20	30		食費40～50。その他協会に年間800、小遣い	20
④	20			食費15～20。小遣い・飛行機代含め月額60～70	15
⑤	20			協会へ月90（研修費・来日帰国費・積立金・管理費） 他に研修旅費20・食費雑費30	20
⑥	20			旅費・経費含め月額70	20
⑦	15	35	15	食費少し	15
⑧	15	35		食費・光熱費・医療費として40。小遣い10。	15
⑨	15	35		食費40。餞別40～50	15
⑩	10～15			食費・作業着代等45。協会に年600（帰国旅費・事務費積立） 研修旅費・たばこ代	10～15
⑪	直接間接で50			旅費・講習会・衣食住で安く見ても100以上。 現金で出すのが80以上だから。	

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。
研修生調査の欄は研修生から聞いた研修手当。

第３項　貯金と不足

以上のように、企業研修生は毎月20000円前後を、農業研修生は手渡分と積立分を合わせて毎月40000円前後を、貯金していた。これは、それが彼らの中国での月収の６～８倍にも当たることを考えれば、当然の行為ともいえる。これを１年間続ければ、彼らの６～８年分の年収が貯蓄できるのである。

しかし同時に、このような貯金が、現実には、研修の必要経費や生活費の厳しい節約によって、ようやく確保されていることも、また事実である。多くの研修生が、「本や資料が買えない」「社員と交流したり、映画にいったりできない」と語っている。また「食費を月に10000円で抑えるために米と卵とラーメンだけ」という研修生もいる。そして「シャツ１枚が私の給料より高い」という日本の

高物価の中、彼らは、「日本はお金の世界ですね。私は貧乏暇なしでどこにも行けない」と語り、多くが、現在の研修費では「少し不足」「全く不足」と感じているのである(*)[3)]。

＊研修費の不足を指摘する研修生の声は、以下の事例に示される。

《企業研修生》「日本の物価が高い。帰る時や買物のお金は足りません。日本人と同じような生活はできません。『省銭』してようやく暮らしている。物価が高くて、まず遊び、次に食事、３番目に買物が大変」「まずお土産・免税品が買えない。次に、『社員活動』としての勉強の資料が買えない。講座に参加できない。映画・劇場など文化活動など見たいけどできない。旅行、社員と飲みにも行けない。もし日本人のように正常に使えば足りない。貯金をすれば足りない。本を買いたいけど値段が高い。１冊2000~3000円でしょ」「日本人より足りません。いろいろ経験したいと思っている。自分の目的は研修だから、社会や経営のいろいろな面を見たい。研修だけで寮に帰っていくのでなく、自分のお金で、もっといろんな所に行って見るにはお金がかかる。日本はお金の世界ですね。私は『貧乏暇なし』でどこにも行けない。衣服の値段も高いですね」

《農業研修生》「日本の市場物価からみると足りない。これが実際の状況だ。現在の私の生活水準は中国にいたときより低い。日本ではシャツ一枚が私の給料より高い。だからとても困っている。研修期間はわずか１年なので、『忍』で耐えるしかない。日本で回りの人と同じ生活をするには研修手当が低すぎる。生活が少し苦しい」「仕事のために帰国のとき日本の電機製品を買いたい。ワープロ・カラーテレビ・ビデオなど。日本で安い品物も中国人には高い。今の研修費ではとても買えない」。

なお、研修生の多くは、こうした貯金が目的で来日したわけでは決してない。彼らの主な研修目的は、あくまで先進技術や経営管理の修得である。彼らの多くは、「『金儲け目的』の外国人出稼労働者を日本は受け入れるべきではない」あるいは「『金儲け目的の出稼』は自分とは無関係なので、日本が受け入れるべきかどうかについて特に意見はない」と考えている。彼らは、安易な外国での出稼は、民族差別的な労働分業をもたらすのみならず、中国の経済発展・日本の社会安定、ひいては日中友好にも悪影響を及ぼすと考えているのである(*)。

＊外国人出稼労働者受け入れに反対する事例は、以下の通りである。

《企業研修生》「海外から外国人労働者を受け入れるのは無理。だから日本政府の態度は基本的に正しい。出稼に来るのはよくない。自分の国で頑張るべき。国の資源もあるのだから、自分の考えを使って。ベトナムや中国は難民ではなくて出稼。我々はお金を稼ぎにきたのではないが、それを目的に来る人は禁止しなければ」「今、お金だけの目的だめです。日本にきていろいろな知識・技術を勉強するのは、当たり前のこと。日中友好のために金儲けの出稼は入れない方がいい」。

《農業研修生》「出稼を禁止するのは正しい。どの国でもきっと禁止するだろう。禁止によって本国（送出国）の物価や治安が安定するのだから」「出稼は受け入れない方がいいと思う。どの国にも法があるし、もし受け入れたらだんだん国は破産し、家も滅びるだろう。本国にとっても、日本にとってもよくない。外国人が増えれば外国人に頼るばかりになり、日本人の仕事熱心もなくなってしまう。それにただで衣食住をする人が増えてしまう。受け入れない方がいいと思う」。

第２節　生活習慣・生活価値の相違

研修生と受入側日本人は、様々な生活習慣や価値観の違いにも遭遇する。

第１項　生活習慣の相違

まず、日常的な生活習慣の相違を見よう（表４－３）。

最も多くの研修生が直面するのは、食物の問題である。企業研修生は、朝夕は自炊が多いが、昼食は会社の食堂等で食べる。また農業研修生は、農家で三食とも日本人と一緒に取ることが多いため、食物の問題は、より顕在化しやすい。研修生には、生卵や刺身、鮨、納豆等が食べられない者が多く、また日本の調理や材料全般が口に合わない者もいる。ある内蒙古出身の企業研修生は、魚が食べられず、三食とも自炊している。またある受入農家は、研修生の好みに合わせて食事を中華風に変えたり、豚肉を食べないウィグル出身のイスラム教徒の研修生のために食事を二重に作っている(*)。

表４－３　生活慣習の違い・問題点

		医療・健康	日本の食事	行儀マナー	宗教	全般的
企業	①	◎	○	◎		
	②	○		◎		
	③	○		◎		
	④	○	○			
	⑤		○	◎		
	⑥					○
農業	①		○	○		○
	②		○	○	○	
	③		○	○		
	④		○			○
	⑤		○			○
	⑥		○			○
	⑦		○			◎
	⑧		○			
	⑨			○	○	
	⑩			○		○
	⑪					
	⑫					

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。
(○＝受入側、◎＝研修生側)

＊食文化の違いと受入側の対応を示す事例は、以下の通りである。

《企業》「初めは彼らの食事がわからなかった。日本に慣れてもらう、なじんでほしいという意味もあって社員食堂の食券を渡したら、１週間で『朝から白い米では胃がもたれるから電気釜を買ってほしい』と自炊を申し込んできた。それで炊飯ジャー、鍋、まな板、麺棒を買ってあげた」「最初は日本食が食べられなくて、特に内蒙古から来た研修生。もう１人は西安にいたから日本食も大丈夫だけど。魚も食べられないから、殆ど肉。今でも昼は自分で弁当作ってもってくる」

《農家》「食物のトラブルで最初てこずる。食わず嫌い。家族よりも研修生にあわせた食事、中華料理が多くなる。簡単なもの、刺身や生ものはだめ。手間のかかるものが好き。忙しいからと簡単なものにすると、夏などは、『危険な食物』といわれる。食事に慣れるのに２カ月かかる。２カ月で慣れられるか、それとも最後までだめかのどちらか」「ウイグル新疆から来た人はイスラムなので豚肉を食べない。二重に作らなければならない。食物はしょっぱいもの、我々からみたら塩を食べてるようなもの。食べてみないうちから塩を入れてる。１キロの砂糖が２～３日でなくなってしまう。こちらが慣れないとしようがない。研修生は来たらすぐ食物とかで精神的に落ち込む」。

また礼儀の面でも、自分の意見を率直に出す中国人と、挨拶等の形式や遠慮を重視する日本人との間で葛藤がある(*)。特に企業研修では、研修生が日本人に「合わせている」ことが多く、研修生側に葛藤が集中している。他方、農業研修では、同居であるため双方が「合わせきれず」、受入日本人側にむしろ葛藤が深い。

＊「率直や正直」と「遠慮や挨拶」に関わる葛藤の事例は、以下の通りである。

《企業研修生》「中国では礼儀作法が簡単。挨拶等、日本は複雑で慣れない。日本では礼儀正しく、いい人間関係が多く、周囲の人と仲良くしようとする。でも自分の考えを曖昧に言う。表と裏が同じかどうかわからない。中国では直接に言う」「中国と日本の礼儀はちょっと違います。中国人は何かあったら率直に言う。日本人は言わない。おはようございますとかお辞儀等、初めは慣れなかった。でもそういうことをしないと『礼儀知らず』にされてしまう。日本の生活は気疲れする。仕事から帰ってちょっと疲れる。生活習慣が日本と中国は違うので不便はいろいろある」

《受入農家》「普段の生活習慣が違う。中国人の良い所は『頑固者』。一度言ったらまちがっても引き下がらない。自己主張が強い。いい面に出るといいが、研修生としては良いことではない。帰国して指導者としていい面に出ればいいが、社会主義体制の中で権力に転化するとまずい。日本人は社交辞令が多い」「中国人は人に対して無神経。それに中国は国営企業だから、社長にむかってヒラが平気でものを言える。つまり研修生でも農場主と平等。遠慮というものがない。それが難しい点」。

さて、単身生活の企業研修では、医療・衛生観念の相違も、受入側の不安要因となっている。企業研修生の多くは、出費を切り詰めようと、病気になっても病院に行かない。また彼らは、なじみが薄い日本の薬を飲もうとせず、中国から持参した漢方薬で直そうとする。こうした習慣・知識がない受入側日本人から見ると、その効果は理解しにくく、不安を招いているのである(*)[4]。

＊こうした諸点に関する受入企業の日本人の意見は、以下の事例に示される。「病気になるのが一番こわい。こっちの薬は飲まないで、漢方薬を飲んでいるけど。彼らの衛生観念がどうかも不安だった。ホテルは清潔第一だし。『毎日風呂に入ること』を言い聞かせ、洗顔の注意、洗髪料やドライヤーを買ってやった」「彼らには、病気になったとき、医者にかかるという考えがない。日本の薬も飲もうとしない。漢方薬を飲んで直そうとする。医者に行けといったこともあるが、風邪をひいても薬で直そうとする。何かあればすぐに言えといっている。常時、気をつけている」。

最後に、研修生と同居している受入農家では、宗教的な生活慣習やマナーの違いも大きな問題である。新彊・ウィグル出身の研修生に多く見られるイスラム教の戒律や習慣は、日本人にはなじみが薄い。また研修生が唾を吐いたり、食事のとき音をたてたりすることも、多くの受入農家が、「悪気はない」と理解しつつも、「気になる」と指摘している(*)。

＊農家側からみた生活習慣の相違は、以下の事例に示される。「イスラム教で豚肉は食べない。でも酒は飲む。いい加減。ある程度は妥協してと、こっちは考えているのに、都合のいいやり方に腹がたった。それに2人きたとき、漢民族は回教徒を軽蔑する。私達には、宗教的厳格さがなかなか理解できない」「子供への影響が心配。音をたてて食べることとか、前以て聞いていても、目の前にして改めてわかる。風呂に入った後、汚くしてても平気だとか。中国人は自分に対しても無神経でいられる。食事で音を出すのはよくないとわかっているが、直そうとしない」「習慣が合わない人がいる。習慣の違いが難しい。食事のとき、音をたてて食べるとか。生活習慣は日本人と同じようにしてほしい」。

第2項　日本人の家族・地域生活への見方

さて、家族・地域生活のあり方についても、研修生は日中の文化的相違を感じている（表4－4）。即ち、「日本は家庭生活水準が高い」「日本の妻は礼儀正しい」「日本の夫婦は性別役割分業がはっきりしている」「日本の子供は親から独立している」「日本の近隣関係は疎遠である」等である。

ただし、このような相違を感じているのは、主に企業研修生である。農業研修生の多くは、それほど大きな相違を見いだしていない(*)。

＊企業研修生が感じている家族・地域生活の相違は、以下の通りである。

《家庭生活水準》「日本の家庭生活水準は中国より高い。同じものでも中国よりよい。奇麗。洋服・テレビ・冷蔵庫等」「日本の家庭生活は素晴らしい。部屋に奇麗な電器やピアノがある。環境も清潔で、日本の教育水準の高さを反映している」「家が別荘のように奇麗で、豊かな生活をしている。家が1軒毎に別れていて広く、富が豊富。日本は金持ちで、ガス等の条件がいい。電器製品が多く、自家用車が必ずある」。

《夫婦関係》「中国では男女とも料理を作るし、全部平等。日本は全部女性がやる。日本の妻は優しく礼儀正しい。私は日本がいいね」「日本は、奥さんが礼儀正しい。中国ではそんなに緊張しない雰囲気だ。中国では食事や洗濯は男性も手伝う。日本人の奥さんは家にいて仕事しない。家事をする」「日本の奥さんはみんな主人に対して非常に親切。中国と違う。中国人はだめです。家事分担は違う。日本の女性は食事作ったり、洗濯したり、大変。中国は男女2人でやる」「日本の家庭は礼儀正しい。日本の男性は家事をやらない。中国の男性は皆やる。平等。仕事も半分、家のことも半分する。家事を分担して、お互いに負担を軽減し、夫婦の感情を高める」

《親子関係》「日本の子供は独立性が高い。14~15才になると大人があまり干渉しない。自分の好きなように

させる。中国では、子供からずっと大学出て仕事捜して結婚するまで父母がいろいろな方面で心配する」「日本は子供を自立させる。大学で自分でアルバイトさせる。大学で勉強しながら仕事する。自由自在にさせる。だから自立する。中国ではアルバイトがない」「日本の子供は小さい時から『自主』が強い。今、中国は子供１人ずつだから、大学出て結婚するまで親が面倒をみる。子供中心になっている。中国は接触が多いね。日本は接触が少ない」「日本は、子供と両親が結婚後、連絡が少ない。中国は結婚しても週に何回も連絡する。日本は自主的。中国は伝統的に親子一緒に住んでいる。都市では住宅問題があって別々に住むようになっているが、時々訪ねるし、家族の思想がある。若い人は独立したいが、でも条件が制約されていますね。日本は独立性が高い」。

表４－４　日中の家族・近隣関係の相違

		日本と中国の違い								日中で違いはない			
		日本は生活水準が高い	日本の妻は礼儀正しい	日本の夫婦は性別役割分担	日本の子供は独立性が高い	日本の近隣は疎遠	その他生活水準の相違	その他夫婦関係の相違	その他親子関係の相違	夫婦役割	親子関係	学歴志向	近隣関係
企業	①技術者	○	○	○	○	○						○	
	②技術者	○	○										
	③技術者		○										
	④個人企業主	○		○	○	○	○					○	
	⑤個人企業主		○		○								
	⑥管理者	○	○	○	○	○						○	
	⑦管理者	○		○		○							
	⑧管理者	○		○									
	⑨管理者			○	○								
	⑩管理者												
農業	①自営農民									○	○		○
	②自営農民	△							○				
	③農業技術者									○	○		○
	④農業技術者									○	○		
	⑤農業技術者	○							○	○	○		
	⑥農業技術者			○					△			○	○
	⑦農業技術者			△			○				○		○
	⑧農業技術者			○	○	○						○	
	⑨農業技術者					○		○			○		
	⑩その他									○	○		○
	⑪その他									○	○		○
	⑫その他				○		○		○				

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。

《近隣・親戚関係》「中国ではいつも交際する。家族観念が強く、お祝いなどすぐ贈ってくる。日本は強くない。親戚や近所と多分つきあいが少ないでしょう。中国は多い。みんな互いに助け合う。同じ建物の中に何家族も住んでいるので、親が帰っていないと近所で子供の面倒をみてやったり、家事を助け合ったり」「中国では親戚や近所と時々助け合う。日本は隣が誰かわからない。日本は自分の事しか考えていない」。

こうした企業研修生と農業研修生の感じ方の違いには、いくつかの要因が重層している。

まず第１に、日本の家庭・地域生活への接し方の違いである。企業研修生の多くは、休日等にいわば「客」として日本人家庭を訪問したにすぎないが、農業研修生は農家に同居し、より日常的な実態を知っている。そこで企業研修生の印象は、自らの中国での生活感覚と異質な特徴だけがデフォルメされ、比較的ステレオ・タイプなものにならざるを得ない。また客観的な文化的相違に加え、「客」の前での礼儀や態度と日常的な生活文化の混同という要素も無視しえない。

第２に、日本のどのような地域・階層の家庭に接したかという違いもある。企業研修生が訪問したのは、都市に住む管理職や労働者の家庭である。ここでは、比較的、夫婦の性別役割分業が明確で、近隣関係は疎遠である。また、管理職の家庭生活水準は高く、労働者の家庭では子供が大学進学等で別居してアルバイトをしていることが多い。他方、農業研修生が接したのは、いうまでもなく農村に住む酪農家である。ここでは、夫婦共働きが当然で、後継者も同居し、近隣関係も比較的密である。

そして第3に、研修生自身の出身地域・階層に基づく生活様式や「常識」、即ち、基本的な認知枠の違いがある。企業研修生の多くは、1人子政策の下にある漢民族で、しかも封建制が希薄な反面、住宅不足が深刻で両親との別居が困難な都市の出身者である。このことが企業研修生の「日本の子供は独立性が高い」「日本の妻は礼儀正しい」等と感じる基礎にあることは否めない。また、農業研修生は全体にそれほど日中の相違を感じていないが、その中でも、例えば同姓村落の農民出身者には、散居形態の北海道集落を見て日本の農村には「近所がいない」「往来が少ない」と感じる者もいる。また内蒙古農村部出身者は、「モンゴルでは男は家事をしない。だから日本と同じ」と語る。さらに都市部エリート家庭出身の農業研修生は、「いつも町で暮らしていたから、日本に来てからの生活は中国にいたときより程度が落ちる。こちらには文化娯楽も何もない」と感じている。

第3節　研修生をめぐる社会諸関係

では次に、日本滞在中の研修生をめぐる社会諸関係について分析しよう。

第1項　研修生相互の社会諸関係

まず、中国人研修生相互の社会諸関係である（表4－5）。

これは、企業研修と農業研修で大きく異なる。即ち企業研修では、6社中4社が2名の研修生を受け入れているため、多くの企業研修生は日常的に交流できる。また企業研修生は、札幌市内の寮・社宅に住んでおり、休日には集まって余暇をすごしている。さらに企業研修生は、日本語学習のために週1回集合する。企業研修生の相互交流は、かなり頻度が高いといえよう。これに対し、農業研修では、各農家は基本的に1人ずつ中国人研修生を受け入れている。また各農家は北海道全域の農村に分散し、しかも休日が少ないため、研修生相互の対面接触の機会は企業研修に比べて遥かに少ない。

ただし交流の質をみると、企業研修生よりむしろ農業研修生の方が、研修生仲間を精神的な頼りにしている側面が強い(*)。前述のように、農業研修生は、研修内容や研修時間、労働観、生活慣習等々の面で、企業研修生以上に深刻な葛藤・ストレスを感じていた。その上、それらを日常的に対面交流する中国人の仲間が、企業研修生以上に少ないのである。そこで彼らは、手紙や電話で様々な問題や要求をお互いに相談・交流している[5]。また数少ない学科・見学研修で集まった際には、積極的に話し合うことで普段のストレスを発散している。そして農業研修生の多くは、旧正月など「研修生が集まる機会」の増加を切実に求めている。またこのことと関わり、農業研修生には、帰国後も研修生で相互に交流したいと考える者が、企業研修生以上に多いのである。

＊農業研修生の団長は、研修生相互の社会関係を次のように語っている。「自分は団長だから、みんなから電話がくる。牧場で困ったことがあると研修生はいつも私に電話かけて相談する。中国のことを相談するためにも1年に1度位一緒の研修生に会いたい。研修生は中国の伝統的な旧正月の祭りにみんな集まってお祝いしたい。でも、この意見、交流協会は受け取らない。1年に1回も合えない。みんな会いたがっているが。いつも手紙や電話で連絡している。帰国後も今の研修生とは交流したい。郵便や電話、面談で横のつながりをとっていきたい。相互交流で意志疎通を図り、お互いに助け合って建設・応用し、ともに発展させていきたいと思います」。

表４－５　滞日中の中国人との社会関係

		研修生相互				中国との交流		備考
		同じ職場に中国人研修生	休日に対面交流	電話で交流	帰国後の交流意志	電話交流	手紙交流	
企業	①技術者	○	○	○	○	２月１回	月１回	
	②技術者	○	○	○	×	半年１回	月２回	相談相手－研修生
	③技術者	○	○			半年１回	月５回	
	④個人企業主	○		○	△	半年１回	３月１回	
	⑤個人企業主		○	○		半年１回	不定期	
	⑥管理者	○	○	○	○		たくさん	相談相手＝研修生
	⑦管理者	○	○		△		月１回	
	⑧管理者	○		○	△		２月３回	
	⑨管理者	○			△		月２回	
	⑩管理者		○		○	２月１回	月１回	大学留学生（中国人）と交流
農業	①自営農民			○				
	②自営農民		○		○		月１回	
	③農業技術者			○	○		週１回	
	④農業技術者			○	○		月１回	相談相手＝研修生
	⑤農業技術者			○	○	通算１回	週１回	
	⑥農業技術者			○			月１回	心の支え＝妻のこと
	⑦農業技術者		○				月２回	
	⑧農業技術者				○		週１回	
	⑨農業技術者				○		月１回	
	⑩その他			○	○		月２回	
	⑪その他			○	○		月１回	相談相手＝研修生・心の支え＝中国からの手紙
	⑫その他		○	○	○			相談相手＝研修生・心の支え＝中国からの手紙

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。

他方、こうした農業研修生の連絡・交流のあり方は、受入農家側の不満の一因となっている。まず、３０分以上にわたる頻繁な電話連絡は、農家にとって「電話を占領されているようなもの」である。また研修生が情報交流し、「どこの牧場が楽か、牧場比べをして働かなく」なったり、「『朝の仕事は９時まで。休みは月３回。昼寝つき』など勝手に条件を決め」てしまうことは、農家側の大きな不満である。さらに学科・見学研修で集まった農業研修生が「勉強どころでなくワーワー騒ぐ」ことは、学科・見学研修が不要だという受入農家側の主張の根拠のひとつになっている(*)。

＊この点に関する農家の不満は、以下の通りである。「長電話には困る。他の研修生との電話は１回10分以内にしなさいと言っても、30分以上かける。２回・３回と連続で。電話を占領されているようなものだ。それにお互いに牧場比べをして、よその牧場の方が楽だと言い出すこともある。よそはよそで大変なのに、隣の柿はよく見えるで、お互いに羨ましがる。農業で楽というのはないはずだが。学科・見学研修でも牧場比べをする。どこの牧場が楽かを話し合って、１～２人位は仕事しなくなってしまう。１年で３回位牧場を変える人も出てくる。学科・見学研修で本当に勉強するのならいいが、集まってワーワー騒ぐだけ。法務省でも怒られた。勉強どころでなくワーワー」「他の研修生と長電話が多くて困る。研修生どうしで牧場を比べて、情報を出し合い、『朝の仕事は９時まで。休みは月３回、昼寝つき』など勝手に決められて困ったこともある。協会の人にきてもらい、元に戻した」

第２項　日本人との社会諸関係

表4－6　生活過程における日本人との接触

		来日前職業	部屋の形態	部屋の人数	日本人との生活で苦労すること	心がけていること	日本人との生活で楽しいこと	日本人の中国人に対する態度				日本で受けた差別
								日本人は親切で中国の伝統や文化を尊重してくれる	日本人は一見親切だが、心の中では何を考えているかわからない	日本人は中国人に対して見下すような態度をとる人が多い	日本人は中国人が日本の文化習慣に同化しなければ仲間にならない	
企業	①技術者	寮	1人		（中国人のみ）		旅行・飲み会	○	○	○	○	
	②技術者	寮	1人		交流なし	なし	なし	○	○	○		
	③技術者	寮	1人		（中国人のみ）				○		○	
	④個人企業主	寮	1人					○	○	○	○	
	⑤個人企業主	寮	1人									
	⑥管理者	社宅	1人					○	○	○	○	
	⑦管理者	寮	1人		（中国人のみ）			○		○		有り
	⑧管理者	寮	2人（中国人）		交流なし	日本の習慣尊重	なし		○			
	⑨管理者	寮	2人（中国人）		交流なし	なし	なし	○				
	⑩管理者	寮	1人		（中国人のみ）						○	
農業	①自営農民	離れ	1人					○				
	②自営農民	18畳	1人		なし							
	③農業技術者	6畳	1人		なし	礼儀と規則を守る	なし	○				
	④農業技術者	事務所	2人（中国人）		なし	挨拶・習慣・衛生	日本語・日本社会の勉強	○				有り
	⑤農業技術者	8畳	2人（日本人）		なし	仕事を懸命にする	日本人の勤勉の理解	○				
	⑥農業技術者		1人		なし	衛生	日本語の勉強	○				
	⑦農業技術者	10畳	1人		なし	ＮＡ	日本語と技術の勉強					
	⑧農業技術者		1人		生活テンポ速い	日本の習慣に合わす	日本人の勤勉の理解	○				
	⑨農業技術者	6畳	1人		なし	なし	日本人の勤勉の理解	○				
	⑩その他	4半畳	1人		なし	仕事を懸命にする	なし	○	○	○		
	⑪その他	6畳	1人		なし	仕事を懸命にする	なし			○	○	有り
	⑫その他	8畳	1人		なし	なし	なし		○			

実態調査より作成。プライバシー保護のため、研修生のＮｏは表毎に不統一。

では次に、日本人との交流・社会諸関係について見よう（表4－6）。

まず企業研修生は、個室の寮に住んでいるが、寮の多くは、中国人専用か、あるいは日本人社員が住んでいても殆ど交流はない。そこで彼らは、職場以外では日本人との交流が少なく、「日本人とつきあうチャンスがない」「もっと日本人とのコミュニケーションがほしい」と感じている。また職場でも、「日本では話しながら仕事をすることが許されず、「日本人はみんな黙ったまま仕事をする」ので、「毎日、日本人と一緒に働いていても話をする機会がない」と語る者もいる。そこで企業研修生には、「日本人は一見親切だが、何を考えているかわからない」と感じている者が多い(*)。

＊日本人との交流の少なさに関する企業研修生の意見は、

以下の通りである。「寮は中国人だけだから、日本人と話す機会が少ない。もっと日本人とのコミュニケーションがほしい。日本人の生活に興味がある。知りたいけどできない。付き合うチャンスがない。日本語も上達したいけどできない。毎日日本人と一緒に働いていても話をする機会がない。日本人は黙ったまま仕事をする。中国ではみんな話しながら仕事をする。日本では、話しながら仕事をすることは許されない。日本人は中国人に対していくつかの距離をおいてつきあっている」「寮では、別の部屋に日本人も住んでいるが、互いにつながりはない。お互いにあまり訪ねない。今はあまり日本人に接していない。日本人が何を考えているのかわかりにくい」。

これに対し、農業研修生は、農家に同居しているため、一方では、日本人との日常的交流の中で日本社会や日本語、農業技術、日本人の労働観等の勉強になるという肯定的評価が見られる。しかし他方で、農家家族員との人間関係を円滑にするため、「仕事をより一生懸命に」し、「不満や要求があってもいわずに仕事に没頭」し、日本の生活慣習に極力合わせなければならない側面もある。中には、それでもうまくいかず、研修先を変更せざるを得ない事例もある。また、農業研修生は、自由時間が少なく、しかも自動車がなければ移動しにくい農村に住んでいるため、農家家族員以外と交際する機会が少ない。ある農業研修生は、「ここには若い人が少ないから自分の心情の話ができない。そういう話ができる日本人の友達がほしいが、この回りにはいない」と語っている(*)[6]。

＊日本人との同居で農業研修生が心がけ、苦労している事例は、以下の通りである。「いつも年配の人や周囲の人に礼節・礼儀を尽くし、規則を守るよう心がけている」「挨拶や日本の様々な風俗習慣、衛生等心がけている。以前いた農場では、農場主との関係が悪く、１日中殆ど楽しいことも、学ぶこともなかった。とても悩んだ」「毎日、牛舎で仕事しているので着物が汚いと言われないように注意している。家を汚さないように汚い着物は脱ぐ」「日本の生活テンポが速い。ご飯を食べるとき、大きな声でしゃべらないようにしている」「できるだけ仕事を一生懸命によくやるように注意している。いろいろつらいことがあります。仕方がないので我慢するだけです。人生難しいですから、我慢を勉強しなければ」「一生懸命働いてからこそ、農家の人とやっといい関係ができる。ある農場では、いつもしかられている。ある農場主は研修生と喧嘩した。１日中牧場主と一緒に生活しているから、いろんな問題が起きる」。また既に帰国した農業研修生の手記には、次の記述もある。「彼ら（受入農家）は私達が仕事に没頭さえしていれば満足している･･･。私は･･･不満があっても一笑に付します。『何か要求や意見がありますか』と聞かれても、いつも、『ありません』と答えます。こうすると自分も悩むこともないし、相手も満足しますから。ですから私の受入先は私を褒めています」「日本に来て、生活、仕事、言葉などがまだよく分からない時は、特に受入側の理解が頼みの綱なのですが、主人側が理解してくれないことが多いです。特に自分は善意でしたことが主人の誤解を招いて責められた場合には、とても悔しく感じます。私はいつも日本の青年達と一緒に仕事をしますが、互いに気持ちの上に行き違いが起こった時、主人はいつも私を叱ります。この事を私はどうしても納得することができません。･･･私達は研修生として、来日の主な目的は技術の勉強です。不思議と思う事でも余り真剣に追求しないで、受入側との関係をどううまく打ち立てられるかを先に解決（すべき）」「私の受入側は････気が短くて、ちょっと何かあると、すぐ怒ります。自分が悪いと納得できない時など我慢するのはつらいことです。しかし、冷静に考えると、この人間は悪い人ではないし、それに、日本の家族では主人が厳しく、怒りやすいのは当たり前だと考えることにしました」。さらにまた、受入農家側にも「彼は人間関係がうまくいかず、受入機関から２回来てもらった。もう大人なんだから、自分の希望は自分で言いなさいといわれたんだけど、何も相談してこないね。牧場主には何も言わないんじゃないか。内向的な性格だから」との指摘がある。また、受入農家以外との交流の狭さを指摘する事例としては、「１日中働いているから、農場の人以外、話せる人がいない」「ここには若い人が少ないから自分の心情の話ができない。自分で考えていることの話もできない。そういう話ができる日本人の友達が

ほしいが、この回りにはいない。日本人の頭の中、どういうふうかわからない。仕事の話と冗談だけしか言わない」等がある。

また日本人との交流の中で民族差別を感じた研修生も3人いる。「社員とスナックに飲みに行ったとき、他の客が中国人を馬鹿にした」「郵便局に中国への手紙を出しに行くと、金を送ると疑われて文句を言われた。日本人にはそんな文句はいわないのに」「以前いた農場の主人が中国人を差別した」等である。こうした民族差別の体験は、企業・農業双方の研修生に見られる。しかし、「日本人には中国人に対して見下す態度をとる人が多い」「日本人は中国人が日本の文化に同化しなければ仲間にならない」等、いわば潜在的な民族差別・隔離的態度を感じている者は、特に企業研修生に多い。企業研修生の多くは、前述の日本人との社会諸関係の希薄さが、「中国人だけの個室の寮」等の客観的条件のみならず、日本人の差別・排除感覚に基づくものであると感じ取っているのである(*)。

＊民族差別感覚を指摘する企業研修生の事例は、以下の通りである。「日本は外国人を受け入れるのが下手。そこがアメリカとは違いますね。アメリカに行ったことがあるが、日本よりよかった。日本人は排外性が強い。中国人と国民性ちょっと違います。日本人の思想は狭いです。中国人はもめ事とかあっても解決すれば忘れるが、日本人はもう一度言ってこだわる。心が狭い。中国は、今、貧乏でしょ。でも、もしお客さんがきたら、招待しますね。100元でも150元でも。1カ月の給料全部出しても歓迎します。自分は大丈夫だから、と言ってお客を大事にします。日本人とは思想が違う。だから日本人との人間関係は難しい。特に日本政府・入国管理局の職員は、態度が厳しくて、印象悪い。我々は技術を勉強にきているのだから、もっと友好的にしてほしいです」

第3項　相互理解の進展

とはいえ、こうした中で、受入側日本人が中国人研修生の生活を様々な形で援助し、相互理解を促進していることも、また事実である（表4－7）。

企業研修は、初年度であり、企業として特に様々な配慮をしている。即ち食糧の提供や自炊方法の教育、防風・暖房の配慮、キャンプや海水浴など社員の慰安行事への招待、健康状態や要求の聴取等である。また企業役員・社員も、個人的に研修生を食事や飲酒、観光に誘ったり、食糧をさし入れたり、自宅や故郷に招いたりしている。さらに、中国で地震が起きたときは、企業として国際電話で連絡を密に取り、研修生に情報を提供している(*)。

＊各企業の配慮の事例は、以下の通りである。「たまにいろんな所に連れて行って食べさせる。最初、米・味噌・調味料を用意したが、彼らは炊事をやったことがなかった。電気釜も使ったことがない。そこで米とぎから教えた。中国人は男女とも料理できると聞いていたが、正確な情報ではなかった。寮の周辺の清掃に留意し、寒いのではないかと窓にビニールをはってあげた。暖房の灯油も会社で運搬して確保しておく。社員が休みを利用してどこかへ連れて行ったり、一緒に観光や買い物などやっている。会社として夏にキャンプ。単なる海水浴ではなく、協力してみんなで作業して仲良くなれるように。冬は温泉。コミュニケーション図れるいい機会。その他、飲みにいったり。出社した時には健康・顔色を気にしている。困ったことがないか、聞き取りを頻繁にしている。中国の大地震の震源地が彼の出身地だった。向こうの情報はできるだけ早く伝える。国際電話も何回もかけた。4～5日は連絡とれなかったが、最後は連絡がとれて安心していた」「できるだけ日本の社会になじませようと、強制ではないけど、休日にどこかに連れていったり、社員が差し入れしたり。健康にも常時気をつけている。何かあればすぐに言えと言っている。結婚式や葬式、忘年会、観光地回りにも出席させている」「社員とも誘いあっていくようにしている。要求についてはできるだけ彼らの方から話してもらうようにしている。交友関係をできるだけ広げてほしいと思って、社員が自宅や郷里に招いたりしている」「長い休みは誰かがどこかへ連れて行かないとね。1日

表４－７　受け入れ側日本人による日常生活の配慮

	食事		住居形態	交流	健康管理	その他の配慮
	形態	配慮	配慮			
企業	①自炊	差し入れ	寮	休日の交流・朝の送迎・飲み会	留意	疑問を後に残さない・日常生活のトラブル防止・コンピューター教育担当者配置
	②自炊	時々外食・炊事教育	寮　清掃・暖房	休日の交流・会社のレク・飲み会	留意	要求を出してもらう・ゆっくり話す・筆談・中国の情報を頻繁に伝える・通勤送迎
	③自炊	自炊施設整備	寮	会社のレク・研修生同士の交流		
	④自炊		寮	休日の交流・朝の送迎		要求を出してもらう
	⑤自炊		社宅	休日の交流・中国人社員との交流	留意	
	⑥自炊		寮		留意	
農業	①家族と一緒	好き嫌いに配慮	6畳個室ＴＶ付	うまくいかない		休日は自由・日本語でゆっくり話す
	②家族と一緒	研修生が全員の調理	6畳個室ＴＶ付	一緒に買い物	留意	休日は自由
	③家族と一緒	生卵以外		一緒に観光	留意	休日は自由・お金はきちんと渡す・休日をきちんととる・簡単な日本語を使う
	④家族と一緒	家族が合わせる（中華風）		家族で交流	留意	休日は自由・自分でやってみて教える・筆談
	⑤家族と一緒	納豆以外		家族で交流		休日は自由・ゆっくり簡単な言葉で話す
	⑥家族と一緒	なまもの以外	個室	研修生同士の交流・中国の話		自分でやってみて教える
	⑦家族と一緒		ＴＶ			休日は自由・一緒に行動する
	⑧家族と一緒					休日は自由
	⑨家族と一緒	特別の献立・材料		研修生同士の交流	留意	
	⑩家族と一緒			休日に交流	留意	
	⑪自炊	時々差し入れ				日記を書かせる

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮＯは表毎に不統一。

の休みは自分で好きにしてもらってるけど。忙しくて、どちらかというとお任せしてることが多いけど、本人がやりたいっていう範囲でやらせてあげることだね。ゴルフにも連れて行ったよ。病気になるのが一番こわい。勉強熱心すぎて夜遅く寝て大変だ。いつも気にかけている」「海水浴や観楓会など社内行事は社員と同じ扱い。研修生が２人いるので、２人とも休日も寮も同じにした。帰るまでに病気や怪我をされたら困る。研修は二の次、一番は健康管理。何とか無事で帰したい」。

他方、農業研修では、既に数年にわたって中国人を受け入れているため、「最初に来たときは、ちやほやしてた」が、今はもう「中国人と接するのが普通」になっている。また酪農は「生き物相手で365日休みがない」ため、観光旅行など意識的な交流も少ない。しかし農業研修の場合、同居しているので、ある意味では企業より一層日常的な交流や配慮がなされている。例えば、食事を中華風に変え、それでも食べられないときは２重に作り、時々一緒に町にドライブやカラオケに行く。また研修生がホームシックになったときは家族ぐるみで話を聞き、さらにワープロや自転車等をプレゼントする農家もある。いわば受入農家は、「家族と一緒に扱って孤立させない」ことと、特別扱いしないことを、同時に日々実践しているのである。そして日常的に労働・生活を共にする中では、むしろ「休日には干渉・束縛しない」ことが、農家の研修生に対する配慮である(*)。

＊農家の配慮の事例は、以下の通りである。「食事を中華風にする。家族ぐるみでいろんな話をする。ホームシックがなくなる。ストレスの解消。健康・身体に気を使う」「けがをしないように。一番気を使っている。休日は本人任せ。夏は忙し

いから、冬の間、どこかに遊びに連れて行ってあげたい。最初に来た人のときはちやほやしていた。中華料理作ってもらったり、回りの地域の人も最初は珍しいから遊びにきていた。学校の文化祭に呼ばれたり、生徒とのミーティングもあった。今は学校からも声がかからない。中国人と接するのが普通のことになってきている」「自分の家族と一緒に扱う。一つのリンゴでも分ける。必ず一緒に生活する。孤立させないんだ。居間にいつもいらせる。俺もアメリカでトレーニングしたときそうだった。休日は干渉しない。束縛しない。俺は今でもアメリカのばあさんと交流がある。あいつら（研修生）にもそうなってほしい」「事故には気を使う。運転覚えると道路に出てしまうことがある。時間があれば、できるだけ多くの日本人と交流しなさいといっている。人と人の交流が第一なんだから。日曜日に時々遊びに連れて行ったり。仕事以外のコミュニケーションを心がけている。ずっと一人にしておくと落ち込むので、飲みにいってカラオケ等すると元気になる。栄養をちゃんと取りなさいと言っている。時々肉や野菜を差し入れている」。

そして何よりも、企業・農家の双方で、受入側日本人は、研修生が理解できるようにゆっくりと繰り返し指示したり、どんな仕事でも一緒にやってみせたり、根気強い指導をしている。ある企業では、「問題点や疑問があれば、後に残さないでその場その場で解決するように」配慮し、コンピューター教育の担当者を研修生のために１人配置している。また多くの農家では、「日本語でゆっくり話す」「実際に自分でやってみせる」「漢字でメモを書く」等の努力をしている。

以上のような援助・配慮を、研修生の多くは、積極的に評価し、感謝している（表４－８）。また研修生の中にも、日本人の文化や感情まで、深く理解しようとする者が少なくない。そうした中で研修生の約８割は、企業や農家に信頼できる日本人を見い出してきている。また、企業研修生の半数、農業研修生の３分の１は、「何でも相談できる相手」として受入企業・農家の日本人をあげている。そして研修生の６割強は、「日本人は親切で中国の習慣や文化を尊重してくれる」という評価をもってきており、殆どが帰国後も個人的に交流を継続したいと考えるに至っている(*)[7]。

＊受入側日本人に対する研修生の肯定的評価の事例は、以下の通りである。

《企業研修生》「会社の人は私達の世話をしてくれる。展示会や旅行にも連れて行ってくれる。朝、課長が迎えにきてくれる。楽しいのは旅行で景色のいい所に連れていってくれる。社員と飲みにいくのも楽しい。信頼できる社員は１０人以上、たくさんいる。相談相手は会社の上司。帰国後もこの人々と交流します」「会社の人１０人以上信頼できる。喜びは、交流して一緒に参加するとき。一緒に魚釣りに行ったり、社員宅に訪ねているときなんか、思想や風俗、互いに話し合って楽しいね。帰国後、仕事について連絡ある方がいいし、あとは自分の友情。大切にしたい」「会社はいつも私に注意してくれる。研修指導員が、私の場合はとてもいい。相談すると何でもすぐ解決します。信頼できる人は会社に４人いる。いろいろお世話になった。気を配ってくれている。景色のいい所にも見に連れて行ってくれる。会社にきて日本人のいい友人ができた。会社の担当者の人が、仕事でも生活でも面倒をよくみてくれる。毎日７時半に車で寮に迎えにきてくれる。中国人を理解している、いい人です。今回お世話になった企業とは、帰国後なお続いて連絡していきたい」「言葉や生活全体について、常に日本人から世話になっている。日本人は親切。日本はとても美しい国だという印象をもちました。自然が美しいのはいうまでもないが、日本人の心の美しさ、中国人に対する友好の気持ちに打たれました。信頼できる日本人は会社の友人など８人」「たまに会社の人と冗談をいったりするとき、気持ちが通じてうれしい。みんな親切で毎日楽しい。研修中、信頼できるのは３人。いろいろな友人と友情関係を続けていこうと思います」「信頼できる日本人は７人。全部、職場の人。日本人は親切で、中国の文化や習慣を尊重してくれる。中国に帰ってもこちらと連絡をとると思う」「カラオケによく連れていってくれる。親切心というものがわからなかったが、こっちにきてからいろいろやってもらって、自分が変わってきたと思う。信頼できる日本人は、何人とは言えないけれど、たくさんいる。困ったことがあれば、すぐに相談している。特に一番の担当は常務で、来日したときから、

表４－８　日本人の信頼関係と帰国後の交流希望

		来日前職業	信頼できる日本人 人数	関係	心の支え	何でも相談できる相手	家庭を訪問した日本人	帰国後の交流希望
介	①	技術者	10人以上	会社の人	ＮＡ	会社の上司	会社の社長・課長	○
業	②	技術者	10人以上	会社の社員・役員	精神力	会社の役員・担当者	会社の会長・社員	○
	③	技術者	なし			中国人研修生	会社の社長・主任	△
	④	個人企業主	４人	会社の人	愛国心・責任感	会社の人・担当者	会社の会長・社員	○
	⑤	個人企業主	８人	会社の社員・役員	勉強	なし	会社の社員	×
	⑥	管理者	10人以上	会社の社員・役員	精神力	会社の役員・担当者	会社の社長・社員	○
	⑦	管理者	７人	会社の人	なし	会社の担当者	なし	○
	⑧	管理者	４人	会社の社員・役員	精神力	なし（問題がない）	他社の社長	○
	⑨	管理者	２～３人	会社の部長・飲屋で知り合った友人	自分の将来の夢	なし	会社の友人	○
	⑩	管理者	なし		精神力	中国人研修生	会社の社員	○
農	①	自営農民	２人	農場主家族	勉強・精神力	なし	近所の農場	
業	②	自営農民	なし		なし	なし	他の研修生の農場	○
	③	農業技術者	20人程度	研修先の人達	自分の自信		なし	○
	④	農業技術者	15人程度	農場主・日本人研修生受け入れ機関の人	帰国後の希望 精神力	農場主	父の友人	○
	⑤	農業技術者	10人	農場主家族とその知人		農場主の弟		
	⑥	農業技術者	６人	農場主家族	妻のこと	なし（問題がない）	農場主の親戚	△
	⑦	農業技術者	５人	農場主家族		農場主の家族	近所の農場	○
	⑧	農業技術者	２人	農場主家族	仕事	農場主の妻	なし	○
	⑨	農業技術者	２人	農場主家族	学習	中国人研修生	なし	○
	⑩	その他	20人程度	農場主家族・町で知り合った友人	勉強		町での知り合い	○
	⑪	その他	なし		中国からの手紙	中国人研修生	なし	○
	⑫	その他	なし		中国からの手紙	中国人研修生	他の研修生の農場	△

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

いろいろ話してくれた。常務がビデオも貸してくれた。TVも映りが悪いといったら、会社のを貸してくれた。帰国後、個人的に常務さん、課長さん、友人等と連絡しようと思う」。

《農業研修生》「自分の努力と友の助けで、今は仕事と生活のいろんな面がすべていい。一切うまくいき、感謝しています。信頼できるのは、研修中は同じ農場の日本人研修生など６人、生活上は農場主やその家族、受入機関の人など９人。一番の相談相手は農場主。帰国後も交流を続けたい」「20人ほど信頼できる日本人がいる。仕事仲間。現在の研修場所の人はみんな信頼できる。日本人は親切。どんなときでもそう思っている。帰国後も交流を続けたい」「３回位、家の車で札幌に行って楽しかった。町の景色を見たり、中華料理を食べたり。牧場主とその奥さんが信頼できる。一番の相談相手は奥さん。農家の人とは帰国後も手紙などで交流したい」「ご主人と奥さん、家族みんな信頼できる。いつもみんないろいろお世話になります。相談します。親切です。帰国後も技術指導をぜひしてほしい。もちろん連絡を続け、交流したい。帰国後も困ったことがあったらいろいろ教えてほしい」「信頼できるのは６人。牧場主の家族。家族と温泉にいくのは楽しい。札幌の町にドライブする。６回位行った。夜にレストラン、日本料理店にドライブして４回位食べた。帰国しても手紙など出すと思う。いい友人です。おもしろいですから常に思い出すと思います」。また既に帰国した農業研修生の手記にも、次の記述がある。「私達研修生は日本の牧場主達と一緒に生活をしながら、言葉、習慣の違いを考慮して両方とも慎重に対応しているけれど、誤解と矛盾の発生はやはり避け難いと思う。異国にいる私達は神経の緊張状態が続くので、牧場主の態度に特に敏感であることも事実である。ちょっといらいらしている時には、彼は私を不満なのか！、怒っているのかと

疑ってしまう。しかし落ち着いて考えてみれば、この様な行き違いは中国でも常に発生している事だ。だから問題があったとき、すぐ結論を出さず冷静に忍耐することがとても大切だ」。

《注》

（１）小遣いや餞別は、農家毎に、また同じ農家でも各年次毎に違う。「遊びにいくときは小遣い・煙草代・酒代。今年の子はよくなかったからあげなかったけど」「カメラやワープロを買ってやったり、食事に連れていったりで月１万位。自転車や衣類を買ってやることもある」「中国に帰る時、お金を渡す農家がある。そうなると研修生が、あそこは何万円もらったと言い出し、混乱するから協会ではお金でなく物で渡すように言ってる。うちの研修生も『いくらくれるの』と聞いてきた。『お金をくれないと帰るときにサイロにいたずらしていくぞ』と言われた。中には帰国のときに牛の尻尾をみんな切って行ったり、刺し殺して行くこともある」。なお受入機関によれば、５万円と食費３万円、その他を合わせて約１０万円であり、一部に北海道の補助が出ている。

（２）農家には、経済的負担が大きいとの指摘が多い。「かけるお金と仕事の量比べて、お金が高い。これ以上高くならないようにしてほしい」「来るまでに費用がかかりすぎる。旅費や経費で月に７万はかかる。今後、情勢が変わったら、経済的にも日本人研修生と同じになる。受け入れる所なくなる」。

（３）ある農家は、「日本人の使用人がいると給料の差がはっきりするから大変。協会に払っているといっても納得しない」と語る。またある企業研修生は、「生活については満足できる。でも、働きばかりさせて、それに対しては足りないと思う。日本人と同じ仕事をさせているのに研修扱い。本当に研修ができるなら、この額でも不満はないが、今のような労働なら不満。日本人ならパートでも時給800円位。私は毎月75000円。この差が大きい。不平等な感じがする」と語り、別の農業研修生も「もしこれが本当の研修ならいいが、今は労働力のような生活だから全然足りない」と述べている。

（４）単身生活に伴う問題・不安も顕在化している。ある企業研修生は、「夜、病気になったり、考えられないことがあっても方法がない。隣にも人がいない。また子供の頃から今までご飯を作ったことがない。ずっと母が作っていた。日本にきて大変だった」と語る。またある農家も「来た時は２カ月位ホームシックで帰りたい、帰りたいばかり。既婚者が多いので、奥さんや子供のことを一時も忘れない」と語る。

（５）研修生の多くは月１～５回程度、中国に手紙を出している。なお企業研修生の多くは、公衆電話で来日後１度中国に国際電話をかけているが、農業研修生は殆どかけていない。農業研修生の多くは、近くに公衆電話がなく、しかも農家から国際電話をかけることは制約ないし遠慮している。

（６）例外的に、「父の友人の日本人宅を訪問した。暖かく迎えてくれ、異国で家族に出会ったような気持ちだった」「日曜に町に遊びに行き、日本人の知人ができ、うれしかった。家に行くととても優しかった」「学科研修の時、農業試験場の博士やホテルの人と友人になった」と語る農業研修生もいる。なお研修先を変更した事例は、農業研修生37名中８名である。手記は、北海道Ａ会『研修生活』より。

（７）既に帰国した研修生と交流を保つ農家の事例として、「帰国後も連絡がある。ビールの中古の製造機があれば紹介してほしいとか、日本で買ったストーブの部品を送ってほしいとか、連絡がある。年賀状もくる。帰ったらそのままの人もいるが、もっと勉強したい人は連絡がくる」等がある。また、「前に来た人が偉くなって選んでくるようになったから、少しずつ良くなってきている。本当に一生懸命に仕事する子も出てきた。日本はこういうものだというのが、向こうにもわかってきたのだろう」「帰国した人が増えてくるに従って、特に内蒙古・ウィグルでは派遣体制がかなりよくなってきた。帰国後、能力を発揮できる体制を作っている」との指摘もある。事例中の手記は、北海道Ａ会『研修生活』より。

終章　中国人・日本人の文化変容

以上、中国人研修生と受入側日本人の労働・研修－生活過程の諸特徴を見てきた。最後に、これをふまえ、研修生と日本人の双方が、相互交流の中で何を学び、どのような文化変容・主体的変容を遂げているのかを明らかにしていこう。

第1節　中国人技術研修生の文化変容

まず中国人研修生についてみる。

第1項　先進的技術と「勤勉」の習得

まず第1に、研修生は、日本の先進技術・管理方法と「勤勉」な労働倫理を学び、それを中国にもち帰りたいと考えている（表5－1）。彼らの多くは、来日前から、「技術や能力を磨き、仕事中心に生き」、それを通して「中国の社会の発展に貢献」したいと考えていたが、現在もその意識を変えていない（表5－2）。むしろその方向で「もっと頑張りたい」と思うようになっている。彼らは、日本企業や中国の日系企業ではなく、中国の企業・職場で働くことを希望しているのである。

こうした傾向は、農業技術者や自営農民の農業研修生に特に顕著である。彼らの多くは、帰国後、日本農業の先進技術と経営方法が役立つと考え、また自らの労働態度が「勤勉になった」と感じている。さらに「中国人は日本人から勤勉さや先進技術を学ぶべき」と考え、研修終了後、中国の農業生産を一層発展させたいと希望している。彼らには、来日前から現在まで一貫して「技術や能力を磨き、仕事中心に生き」、「中国の社会の発展に貢献」したいと考えている者が最も多い。ある農業技術者の研修生は、「我々は日本にきて先進技術を学んだ。帰国したら自分達の手で中国を発展させる。我々が日本にとどまったら、いったい誰が祖国を発展させるのだろうか」と語り、別の自営農民の研修生は、日本式の技術と勤勉さを持ち帰れば、土地と労働力の豊富な内蒙古の牧場がいかに発展するかを情熱的に語っている。また、既に帰国した研修生の中には、日本で学んだ経営・生産技術を生かして30000羽の養鶏共同企業を設立したり、年間6000キロの搾乳量の牛を何頭も育成して赤字企業に1億円の利益をもたらした者もいる(*)。

＊こうした農民・農業技術者の研修生の事例は、以下の通りである。

《農民》「勤勉になった。日本人は勤勉だ。朝早く起きて、夜遅くまで働く。中国人は日本人の勤労精神を学ぶべき。それと技術を身につけたことがうれしい。牛が多く、新しい牛舎が見れてよかった」「日本の先進技術と経営方法を学んだ。仕事に勤勉になった。帰れば、日本と同じような牧場を故郷でもできると思う。蒙古は、牛と畑と両方やって、しかも小さい。日本は、牛だけで規模が大きい。でも蒙古は、条件がいい。草原と労力がある。奇麗にして、人々が厳しい仕事をやれば、蒙古で日本のような農場ができると思う。帰国後、こんな牧場をしたい。日本式の勤勉さと技術をぜひもち帰る」

《農業技術者》「日本人の仕事に対する勤勉な態度を学ぶべき。自分の仕事態度も大きく変わった。これが発展速度を速めるだろう。いろんな技術を勉強した。今後は学んだ知識を国家や自分の事業のために役立てるようがんばる。これから同じ問題に出会ったら解決方法を考える上で啓発を受けた。中国人は日本人の勤勉さや発展指向を見習うべきだ。研修が終わったら帰国する。我々は日本に研修にきて先進技術を学んだ。帰国したら自分達の手で中国を発展させる。我々が日本に留まったら、誰が祖国を発展させるのだろうか」「経営の勉強になった。自分の仕事に対する態度にも必ず変わった所がある。日本人の仕事態度、仕事の効率性、質量、勤勉さ、競争原理、新製品の開発、いろんな技術等。将来、日本で学んだことを生かして個人経営農場をやりたい」「日本の牧場技術・管理技術は中国でも使える。仕事に対する態度は大

表5－1　学んだこと・学ぶべきこと

		来日直前の職業	役立ったこと	仕事への態度の変化	中国人が日本人から学ぶべきこと	帰国後の計画・希望	日系企業で働きたいか				研修期間延長	研修生の受け促進希望
							家族と日本に住んで働きたい	自分だけ日本に住んで送金したい	中国の日系企業で働きたい	やはり中国の企業職場で働きたい		
企業	①技術者				勤勉・創造精神・礼儀	元の職場。日本語を生かした職種希望				○	希望	賛成
	②技術者					元の職場。				○	希望	賛成
	③技術者		コンピューター		礼儀	元の職場。転職希望。			○			賛成
	④個人企業主		日本語	なし	勤勉・礼儀	元の職場。				○	希望	賛成
	⑤個人企業主				勤勉・研究心・能率管理	元の職場。					希望	賛成
	⑥管理者		経営感覚・サービス	勤勉・高い技術	勤勉・創造・礼儀・団結	元の職場。				○	希望	賛成
	⑦管理者		日中友好・サービス	サービスの態度	勤勉	元の職場。			○			賛成
	⑧管理者		総合的能力が伸びた	部下への接し方	勤勉	未定			○			賛成
	⑨管理者		管理手段・先進技術	勤勉	民族精神	可能なら個人経営したい。	○					賛成
	⑩管理者		あまりない	勤勉・視野の広さ	勤勉	元の職場。転職希望。				○	希望	賛成
農業	①自営農民			勤勉	勤勉	元の農民。				○		賛成
	②自営農民		先進技術・経営方法	勤勉	勤勉	元の農民（日本的経営をしたい）				○		ＮＡ
	③農業技術者		経営方法・技術	勤勉・効率性	勤勉・効率性・競争原理	未定。将来は個人経営農場。		○			希望	賛成
	④農業技術者		先進技術・経営方法	勤勉	勤勉	元の職場。				○	希望	賛成
	⑤農業技術者		問題克服方法・技術	勤勉	勤勉・発展指向	元の職場。				○		ＮＡ
	⑥農業技術者		先進技術・経営方法	勤勉	勤勉・国際交流	元の職場				○		ＮＡ
	⑦農業技術者		先進技術	勤勉	勤勉・先進技術	元の職場。将来は個人経営農場。				○		ＮＡ
	⑧農業技術者		経営方法・開発態度	個人経営精神	勤勉	元の職場。				○		賛成
	⑨農業技術者		乳牛技術			元の職場。				○	希望	ＮＡ
	⑩その他		日本語			未定。日系企業	△	△	○		希望	賛成
	⑪その他		日本語	勤勉・意志を強く	発展精神	ホテル。日系・香港系企業・大学			○			賛成
	⑫その他		経営方法・牧場技術	なし	勤勉	未定。将来は個人経営農場。				○	希望	賛成

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

きく変わった。日本人のように精神的に一生懸命働くようになった。日本人の仕事態度にはっきり学ぶ。日本の技術を学んで中国の建設のために一生懸命に働く。中国人ももっと勤勉さを学ぶべきと思った」「日本滞在の１年のいろいろ見たこと、優れた技術、経営方法を周囲の人々に伝えてね。自分の仕事の仕方も変わったね。日本人の考え方、もっとしっかり働くこと。これを中国人にも教えたい。中国人の一は、日本人の一生懸命のやり方を学ぶべき。中国は自分の国ね。社会の発展に力を出す。自分の国で力を出すのがいい」「乳牛技術をしっかり学んだ。帰ったら、私の故郷に日本の乳牛の技術を取り入れて発展させる。日本の個人経営精神のように仕事をしようと思う。牧畜改良など先進的にしたい。日本の技術は世界で１番とはいえないが、自分で改良する態度・仕事に関してはたくさんのことが学べた。中国に帰ったら牛の質

を改善してもっと量をたくさん取れるようにしたい」「仕事に対する態度は変わった。時間内によく働くようになる。日本人はとても先進。技術も精神も。日本にきて目で見てそう思った。日本人の仕事の先進さと仕事の熱心さ、これはみんな見習いたい。日本の先進技術を学んだ。中国で使うことが研修中の心の支えだった。中国はやはり自分の祖国だし、自分にとって最もよく適応できる。日本で勉強したこと、日本の技術の本を翻訳したい。牧場関係の本をたくさん知らせたい」。

表５－２　生き方についての考え方（来日前と現在）

		来日前						現在			
		家の伝統を守り、両親を大切に生きる	お金をたくさん儲けて金銭的に豊かに暮らす。	技術や能力を磨き、仕事中心に生きる	自分の趣味を大事にしての生きる	社会的に弱い立場の人に役立つように生きる	中国の社会の発展に貢献するように生きる	来日前と変化なし	お金をたくさん儲けて金銭的に豊かに暮らす	技術や能力を磨き、仕事中心に生きる	自分の趣味を大事にしての生んびり生きる
企業	①技術者			○			○		○		○
	②技術者			○			○	○			
	③技術者			○			○	○			
	④個人企業主		○	○				○			
	⑤個人企業主			○		○		○			
	⑥管理者		○	○				○			
	⑦管理者	○		○	○	○	○	○			
	⑧管理者			○			○	○			
	⑨管理者			○	○			○			
	⑩管理者			○	○			○			
農業	①自営農民			○			○	○			
	②自営農民			○			○	○			
	③農業技術者	○		○				○			
	④農業技術者			○			○	○			
	⑤農業技術者			○			○	○			
	⑥農業技術者			○			○	○			
	⑦農業技術者			○	○	△		○			
	⑧農業技術者			○			○	○			
	⑨農業技術者		○	○				○			
	⑩その他				○		○		○	○	
	⑪その他	○		○	○			○			
	⑫その他	○			○			○			

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

＊前年度の農業研修生も、研修中、次の手記を記している[1]。「四カ月たって我々は日本の酪農家達が激しい競争の中に生き残るために、真剣によい品質を求めている事がようやく分かりました。彼らのそうした姿勢はまさに日本社会、特に日本の経済と科学技術が発展する要因の一つだと思いますし、私達はこの態度を学ぶべきだと思います」「前半の研修を通して、私達は日本の乳牛事業を理解しただけではなく、更に日本社会の発展状況と日本国民の勤勉、誠実、粘り強い精神を学びました」「先日私は入院しました。退院した時、医者も牧場主も私にしばらく休む様言いつけました。しかし牧場に戻って、皆さんが一生懸命に仕事をする様子を見て、何とも言えない気持ちが湧いてきました。･･･自分でもよくわからないけど次の日から仕事を始めました。一緒に仕事をする日本人実習生･･･が、『どうして休まないのですか。あなたの座右の銘は何ですか』と私に聞きましたので、私はすぐ『忍耐』二字を書いてあげました」。

＊既に帰国した農業研修生の活躍の事例は、以下の通りである。「1986年、河南省からきていた研修生は、きた当時、『帰ったら庭にいる鶏を増やして3000羽にしたい』といってたので、『１万羽にしなさい』と、飼料の計算の仕方、事業計画書の作り方、経理の仕方を教え、中国でトーモロコシがいくらかかるのか、手紙で聞かせた。日本にいる時から中国のデータをパソコンに入れて計算して、鶏の飼育管理の基本を教えた。今、彼は３万羽の養鶏をしている。農民銀行からお金を借りて、一族の村で共同経営の会社を作った。生産物の６割を政府に納め、４割を自由市場で売る。作る際には、毎月のように『先生、どうしたらいいでしょうか』という手紙がきた。こちらで技術検定協会を作って彼に１級の資格を与えた。彼が帰る時には組合長や理事が中国に一緒について行って、いろんな所で彼を推薦した。種鶏やワクチン注射器も送ってやった。帰国後もフォローして支えている。去年、彼が来てほしいというので、河南省政府の招き

で、技術指導にいってきた。養鶏の飼育管理と鶏舎の構造、ワクチンの投与方法、ヒナの鑑別等、指導してきた」「一昨年帰った内蒙古の青年は、1年で6000キロの搾乳量、中国で最大の牛を何頭も作った。何百頭という牧場で副工場長をしている。その公司は赤字だったのに、去年1年で1億円の利益を出した」。

これに対し、同じ農業研修生でも、来日前、農業と無関係であった研修生の場合、「役立つこと」は、「あまりない。日本語が使えるようになっただけ」という状態である。ただし彼らの中には、研修で「苦しくても頑張る・忍耐」の態度を学び、来日前は、「自分の趣味を大事にしてのんびり生きたい」「家の伝統を守り、両親を大切に生きたい」と考えていたが、研修を経て、「技術や能力を磨き、仕事中心に生きたい」「お金をたくさん儲けて金銭的に豊かに生きたい」と考えるようになった者もいる。彼らの将来は未定だが、「日本の企業は技術をいっぱい勉強することができるから日本企業に勤めたい」「中国と日本の合弁企業、あるいは香港の合弁企業に勤めたい。できれば香港と中国の合弁ホテルに通訳として就職したい。住むのは外国でも中国でもいい」「日本の大学に進学したい」と、必ずしも当面、中国への帰国を希望していない者が多い(*)。

* こうした農業研修生の事例として、「意志が鍛練された。中国では殆ど甘えの生活だった。ここに来たら苦しい生活。役に立つ。苦しくても頑張る。日本人の発展精神・勤勉精神を学ぶべき。これから役立つのは日本語。中国と日本の合弁企業、あるいは香港の合弁企業に勤めたい。できれば香港と中国の合弁ホテルに通訳として就職したい。住むのは外国でも中国でもいい」等がある。

さて、企業研修生では、特に国営企業の経営管理者出身の研修生において、「日本の先進的な管理方法」「経営感覚やサービス精神」が役立つと評価する者が多い。彼らの多くは、自らの仕事に対する態度も、「勤勉になった」「サービスの態度が変わった」「視野の広さを身につけた」等、変化したと感じている。また彼らは、日本人の「勤勉さ」を学ぶべきと感じている。彼らは、来日前から「技術や能力を磨き、仕事中心に」、そして「自分の趣味を大切にしてのんびり」生きたいと考えていたが、今日もその考えを変えていない。また彼らの中には、帰国後、日系企業で働いたり、個人企業を開設したいと考えている者も少なくない(*)。

* 経営管理者の企業研修生の事例は、以下の通りである。「日本で学んだ先進的管理手段と技術を実践の中で使おうと考えている。仕事に対する態度も変わった。よく働くように思想認識した。中国に帰ったら、もっと勤勉に頑張る。将来、もし可能なら、国家が許す状況の下に自己経営工場をやりたい。またできれば家族と一緒に日本で住んで働きたい。日本語や日本社会、日本資本主義について働きながら学びたい」「最も学んだことは、経営管理とセンス。今、中国の一番の問題はサービスの悪さ。帰国したら、私のホテルのサービス、必ずよくする。日本でいろいろ知識・技術を身につけた。思想に影響を受けた。日本人は本当に一生懸命働く。中国人は、もっと一生懸命仕事する態度を学ばなければならない。団結して労働、創造精神といい礼儀。これらを見習うべき」「サービスの態度を学んだ。日本のサービスのレベルを自分でやるようになった。日本人は一生懸命働く。これを学ぶべき。中国に帰って、もし可能なら日系企業で働きたい。中国の日系企業なら、家族と一緒に住めるし給料もたくさん」「日本は資源がないのにいい製品を作る。それは日本人が仕事に対してまじめだから。中国は資源があるのに製品が悪い。中国人は日本人のまじめさを学ぶべき。総合的に自分の力は伸びたと思う。部下の大切さや仕事のことなど、いろいろ考えるようになった。仕事に対して一生懸命の精神。考え方も広くなって将来の仕事に生かすことがある」

これに対し、企業研修生の中でも、技術者や個人企業主の場合、それほど大きな成果を得たとは評価していない(*)。もとより彼らの中にも、「コンピューターの勉強になった」「日本人の労働・創造・勤勉精神といい礼儀を学ぶべきと思った」「日本人は勤勉で聡明、研究心が旺盛。生産管理が科

学的で能率的なことがわかった」等と語る者はいる。しかし総じて技術者や個人企業主には、研修で役立つことが「なかった」、ないし「日本語の習得」のみと感じている者が多い。コンピューターの勉強になったと語る前述の研修生も、もともと中国でコンピューター技術者であり、来日後、特に画期的な先進技術を学んだわけではない。さらに彼らは、「研修を通して仕事に対する態度が変わったか」という質問に対しても、「まだよくわからない」「多分、変わらないでしょう。私は日本に来る前からできるだけの努力はしてきましたから」と、特に影響を受けたと感じていない。彼らは来日前、「技術や能力を磨き、仕事中心に」生き、そして特に技術者出身の場合はそれに加えて「中国の社会発展に貢献」したいと考えていたが、基本的には、その考えも変えていない。唯一、その考え方を変えた技術者出身の研修生は、来日前、「技術や能力を磨き、仕事中心に生きたい」と考えていたが、「自分の学んだ技術が帰国後、すぐに役立つとは思えな」くなり、むしろ「お金をたくさん儲けて金銭的に豊かに」、また「趣味を大切にしてのんびりと」生きたいと考えるようになった者である。そしていずれにせよ彼らは、帰国後、技術者及び個人企業主として元の職場に戻る予定でいる。

＊技術者や個人企業主の企業研修生、及び、農業に無関係な経歴の農業研修生等、「役だったこと」「学んだこと」を十分に自覚化しえていない層ほど、研修期間の延長を希望している。逆に国営企業管理職の企業研修生、及び、自営農民・農業技術者の農業研修生等、「役だったこと」「学んだこと」を自覚しえている層は、研究期間の延長を必ずしも望んでいない。ただし前者も含め、技術研修そのものの意義は認めており、ほぼ全員が研修生受け入れ促進を希望している。「期間延長」の希望は、研修成果を十分に自覚化しえていない研修生の「焦り」の現れともいえよう。

《企業研修生》「あと1年位勉強したい。1年では日本語うまくならない。初めて勉強したことが多いし、1年ではいいことはあまりできなかった」「あと1年位できるなら延ばしたい。普通の人には1年で足りるかも知れないが、私には足りない。1年間は日本の習慣や言葉になれるだけ。勉強するにはもう1年あればいい」「期間が短すぎる。今回は技術を勉強して生かすことはあまりない。経営の方、1年間では短い。日本の経営をよく聞いて自分の考えを広げたい」。

《農業研修生》「研修内容でまだよくわからないことがある。上手になる目的のためには、やはり時間が短すぎる。あと4カ月牧畜方面の工場見学したい。日本の先進技術を一生懸命習いたいが、今、残り時間が少ないから、私達の希望は実現できない。技術方面の学習がまだ足りない」「研修はあまりにも短い。延長したいです。日本語が上手なことまだですから。1年では初歩しか学べない。もう少し深く学んでやっと本当のことが学べる。1年は適応期間にすぎない。たった1年でしょ。1日すぎれば1日期間が減る」。

第2項　日本資本主義社会の矛盾の認識

中国人研修生は、研修生活を通して、日本資本主義社会の矛盾を見抜きつつある。研修生の多くは、来日前は、日本は「経済大国でみんな豊かで文化的な生活をしている」と考えていたが、来日後、「まだ改善しなければならない点も多い」と考えを改めている（表5－3）。

ただし、認識を改めた理由は、企業研修生と農業研修生で異なる。

まず企業研修生は、日本人の生活が仕事ばかりで自由時間がなく、他人のことを考える精神的余裕もないため、人間が「利己的」になり、友達も「競争相手」のようになっているという問題を指摘している(＊)。この認識の背景には、日本における「貧富の差」や「生きるか死ぬかの競争」がある。また日本社会の利己主義は、対外的には「第三世界への援助精神の欠如」として現れる。特に技術者出身の企業研修生は、全員、こうした問題を指摘している。他方、個人企業主や経営管理者の出身者は、中国で自らも多忙な生活をしていたため、こうした指摘は半数にとどまる。

＊こうした企業研修生の事例は、以下の通りである。「日本は経済は豊かだが、日本の生活は『緊張』。きつくて利己的である。文化精神・ゆとりがない。この点を日本は中国から見習うべき。日本人が利己的になるのは社会制度に問題がある。日本は商品は多様だが、国民みんなが豊かではない。大金持と貧乏のものすごい差がある。衣食住ギリギリで困っているのではないが、中国に比べて貧富の差が大きい。それに中国では社長のためではなく、自分のため、国のために働く。クビになる心配がない。だから日本のようにあくせくしなくてもいい。こういう点は中国の方がよい」「日本人は毎日働いてばかり。趣味をする暇もない。中国はみんなのんびり暮らしている。みな、収入は高くないけど、自由な時間が多い。その点、中国の方がいい。日本は収入も高いが物価も高い。中国の自分の給料は低いが、給料の４分の１で生活できた。だから、日本人はケチケチしている。日本が本当に金持の国なら、もう少し外国のことも考えていいのではないか。もっと第３世界の国を援助すべき」「社会の人間関係は日本の方が遠い。日本は競争が強く、競争して生活を豊かにしようとするから、精神的に遠くなる。競争社会だから仕事が忙しい。友達の往来が減って家族内の時間の余裕がなくなる。仲間というより競争相手みたいになる。日本人は中国人から、広い心や人情深さ、人間関係を見習うべき。日本では隣が誰かわからない。日本人は自分の事しか考える暇がない」。

表５－３　日本に対するイメージの変化

来日前		（a）			（b）	来日後、（b）を選択した理由。日本人が中国人から学ぶべき点						
来日後		（a）	（b）	（c）	（b）	生活に精神的ゆとりがない	貧富の差が大きい	生活水準が低い	輸入に依存している	第３世界の援助精神欠ける	その他	不明
企業	①技術者		○			○						
	②技術者		○			○				○		
	③技術者		○			○		○				
	④個人企業主				○	○						
	⑤個人企業主	○				－	－	－	－	－	－	
	⑥管理者		○			○	○				○	
	⑦管理者		○									○
	⑧管理者				○	○				○		
	⑨管理者	○				－	－	－	－	－	－	
	⑩管理者	○				－	－	－	－	○	－	－
農業	①自営農民		○					○	○			
	②自営農民	○				－	－	－	－	－	－	
	③農業技術者		○			○		○				
	④農業技術者		○					○				
	⑤農業技術者				○			○				
	⑥農業技術者	○				－	－	－	－	－	－	
	⑦農業技術者	○				－	－	－	－	－	－	
	⑧農業技術者	○				－	－	－	－	－	－	
	⑨農業技術者	○				－	－	－	－	－	－	
	⑩その他		○					○				
	⑪その他		○									○
	⑫その他			○		(○)		○			○	

注）（a）日本は経済大国で、みんな豊かで文化的な生活をしている。
（b）経済的な豊かさは感じるが、まだ改善しなければならない点も多い。
（c）基本的な生活水準は中国とあまりかわらない。
（d）人民の生活は、全然「経済大国」ではない。ただし（d）の回答はなかった。
実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

他方、農業研修生が日本社会に対する認識を変化させた最大の理由は、日本の農家・農民の経済生活水準が、予想外に低いと感じたことである。日本では、収入も高いが物価も高く、農民生活の経済的ゆとりは、中国とあまり変わらない。特に中国で農業に直接関係していなかった研修生には、中国では上層幹部の子弟で不自由なく生活してきた者が多く、日本で出費を切り詰めた生活を余儀なくされた体験は、日本の高物価や生活苦を実感させる大きな契機となった。また農業技術者や自営農民出身の農業研修生も含め、農産物輸入に対する農家の不安や巨額の負債、後継者が農業に希望を喪失しつつある実態を知ることは、日本の「豊かさ」の質を疑わせるに十分であったといえよう(＊)。

＊こうした農業研修生の事例は、以下の通りである。「来日して、『経済的に発達した国家』だとは感じたが、

平均的日本人の生活水準には『経済大国』は見られない。人民の生活水準は中国とそれほど変わらない」「来日前は、日本は世界一の収入があり、優れた生活をしていると思っていた。今では、日本の農家の生活は中国の町の人の生活と同じ位」「来日前は経済大国だと思っていた。来日後、そうでもないと思うようになった。食物やテレビ、冷蔵庫など何でも値段が高い」。農産物輸入に関しては、「来日して、『経済大国』だとは思うが、原材料がないことがわかった。輸入に頼るとあとで問題になるだろう。外国から買えなくなったらどうするのか。牛乳や牛肉も外国から買うので、日本の農家は困っている。中国もそうなると困る」等がある。後継者問題については、「日本の若い人は牧場があまり好きでない。これは牧場の将来に影響する。若い人と旅行研修の時に、そう感じた。牧場主の息子は大学出たが、牛が好きじゃないので仕事をさぼる」等がある。

第3項　中国社会主義社会の矛盾の認識

さて、中国人研修生は、来日後、中国社会に対しても認識を改めている。彼らは来日前から、中国社会には「経済的繁栄」が最も必要で、次いで企業研修生は「市民生活上の自由」、農業研修生は「民主主義的政治制度」が必要と考えてきた。それは来日後も基本的には変わっていない（表5－4）。しかし彼らは、来日後、それらを改めて一層強く感じるに至っているのである。

来日後、彼らが再認識した中国社会の問題点は、「経済的な未発達」や「経済効率の悪さ」であり、彼らの多くは、その基底に「政治経済体制の制約」があると考えている。そこで彼らは、「市場経済の合理性」「資本主義の競争に基づく革新性や勤勉性」「資本主義的な経営管理」等、資本主義的要素の導入が、今後の中国の発展にとって必要と考えている(*)。

＊こうした認識は、以下の事例に示される。

《企業研修生》「中国にはいろいろ問題がありますね。今は体制の制約があるから経済発展が遅れています。制約がなくなったら、中国の経済発展がとても早いでしょう。企業管理よりも、社会体制の問題があります。中国人がだめなわけではありません。香港・シンガポール・台湾、どこも中国人は多いけれど、経済発展しています。だから中国が経済発展しないのは、中国人が悪いのではなく、体制の問題です。体制さえ変われば、今は中国は貧乏だが、将来は強いと思う。中国人も日本人のようなことができると思います」「社会主義がよくないことは、世界のどこを見てもはっきりしている。資本主義国は世界の先進国になっているのに、社会主義国はみんな遅れたまま。社会主義は経済の発展能力を延ばさない。資本主義では、企業どうしの競争が激しく、うかうかしてると打ち倒されてしまう。だから非常に革新的。戦後40年、日本、韓国、台湾、中国は、殆ど同じ所からの出発だったのに、なぜ日本がいま非常に高いレベルにあるのか。私は、中国の体制に失望している」「日本にきて、中国は何をするにも効率が悪いと思った。中国にいた時もそう感じていたが、予想以上に差がはっきりした。中国はサービスの態度が弱い。そしてこれは全部個人のせいではない。体制の問題もある。中国は95％以上が国営企業。競争が弱い。社会の品物も豊かにならない。資源も人力もすべてあるのに。経済の発展が基礎。政治的な事は難しいので言えないが」「社会主義国は、資本主義の経営管理、技術、企業競争を勉強すべき。これからは中国を日本のように世界経済大国に発展させたい。資本主義の経営管理技術を学ぶべき。そのためには政治制度の改革が必要。企業管理で一番難しいのは体制の問題。経済体制の改革があって、改革後は社長の権利と責任が政府の許した範囲で大きくなってきた。以前は、人事・財務・生産の計画が、社長には決められない。これは困ります。生産能率が悪い。今もまだまだ改善が必要です」「社会制度が全然違うが、今の社会主義には足りない所がある。国の経済管理という面では外国の資本主義の利点に学ばなければ。中国はまだまだ発展途上国だと思った。中国では原料製造から製品販売まで全部1つの企業で行う。多種産業会社が多い。私の企業も工業原料製造が中心だが、トラック運送・食堂・絨毯製造・商業・農業といろいろやっていた。だから日本のような合理的経営が難しい。これは体制の問題です」「中国は全部国営。企業間のバランスを

表5－4　中国社会の見方とその変化

		中国に必要なもの												来日後、中国への見方の変化・再認識した点				
		来日前											現在					
		民主主義政治制度	平和主義国家	市民生活の自由	差別のない社会	経済的繁栄	環境保全の整備	伝統文化の尊重	安心できる治安	社会主義の発展	資本主義の導入	その他	変化なし	変化あり	経済的な未発達	政治経済体制の制約	資本主義要素導入必要	その他諸問題	社会主義の長所
企業	①技術者			○		○			○				○		○				
	②技術者			○		○						政治制度改善	○					自由と民主主義の欠如	
	③技術者			○	○			○					○			○	○	自由と民主主義の欠如・国の経済統制力の弱さ	競争でなく、国が計画的に生産
	④個人企業主			○		○							○		○	○	○	封建制の残存	
	⑤個人企業主			○		○					○		○		○	○	○	自由と民主主義の欠如	
	⑥管理者			○		○	○						○						
	⑦管理者			○		○	○						○					経済分野での困惑・サービスの欠如	
	⑧管理者					○					△	政治改革	○		○	○	○	経済効率の悪さ・封建制の残存・経済重視の必要	平等・社長のためでなく自分のために働く・解雇がない
	⑨管理者					○			○		○			政治制度改善	○	○	○	政治制度改革が必要・自由と民主主義の欠如	
	⑩管理者								○				○				○	貧富の差の解消が必要	男女平等・風俗・家族関係
農業	①自営農民	○			○	○							○		○		○	人口問題・地域間格差	（社会主義に合う所だけ導入すべき）
	②自営農民		○			○				○			○						（よくなるだろう）
	③農業技術者	○				○		○					○		○			資源の合理的開発・コネの廃止が必要	
	④農業技術者	○				○				○			○		○		○		相互援助の精神
	⑤農業技術者	○	○				○						○			○	○	勤勉さの欠如	
	⑥農業技術者	○				○								環境保全整備		○			
	⑦農業技術者			○		○							○					見通し困難	
	⑧農業技術者				○	○	○						○				○	勤勉さの欠如	生活の平等
	⑨農業技術者					○				○			○						
	⑩その他	○		○		○							○		○	○		自由と民主主義の欠如・幹部の世代交代の必要	
	⑪その他			○	○	○			○				○				○	個人所有制強化の必要	
	⑫その他					○	○		○				○					見通し困難	

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

国家がよくとれない。資本主義のような競争が必要。体制の問題と関係があります。中国人は『大鍋飯』。仕事はよくやっても悪くやっても給料は同じ。体制に影響されて労働者の思想が日本と違いますね。日本の企業管理はいいと思いますが、これは各企業の問題ではなく、国民の思想と社会体制の問題です」

《農業研修生》「日本の発展は早いが中国は遅い。中国は、資本主義のいい所を学んで社会主義を発展させるべき。中国の農業事業発展のためには政治経済体制の問題がある。中国は共産主義だから日本とは違う。世界では日本が聳え立っている」「資本主義のいい所は勤勉に一生懸命やること。やっぱりみんな一生懸命やるべきだと思う。中国で、今、民営の工場等で働く人は一生懸命働くので生活水準がだんだん違ってきた」「中国は発展が遅い。もっと早いほうがいい。資本主義のよい所をもってくるべき。そうすれば経済発展が早くなる。中国はとにかく変わらなければならない。仕事をよくするように。仕事をよくする人もしなくなってしまっている。政策が変わらなければ中国は発展できない。もっと外国の優れた点を学ぶべき。やっぱり一生懸命やる人は生活水準が上がる、怠ける人は下がる、そういうようにしなければ」「土地と財産を個人所有にして責任制を強化しなければならない。国家や社会の体制は、人民の日常と密接な関係がある。だから体制の問題は重要だ」「戦後40数年で日本は強い国。中国も一緒に歩いたのに、なぜ日本の後ろになるのか。反体制的な立場をもっている。自分が帰ってから何かをすることはないけど」。

また、中国社会における「自由と民主」の欠如を再認識した研修生も多い。ある研修生は、「日本にきて、もっと中国を民主・自由にすることがいいと考えの角度が変わった」と語り、また別の研修生は、「子供の頃から社会主義の中で生活してきて、社会主義中国がいいと思っていたが、日本にきて中国の悪い所もわかった。資本主義の中の民主や平等をいれたら、社会主義はまだまだよくなると思う」と述べている(*)。

*「自由と民主」に関する指摘は、以下の事例に示される。

《企業研修生》「自分の考えの角度が変わった。中国にいる時、民主主義、自由の生活することが発達したらと思っていた。日本にきてもっと中国を民主自由にすることがいいと思った。日本人は自分のことを他人に干渉されない。中国人は、自分のことを政治のこととして干渉する。それはよくない」「私は中国人でも共産党員ではない。しかし反体制の考えをもっていることがわかると、中国に帰ってからだめになる。日本で資本論がだめなように、中国では資本主義を言ったらだめ。中国では普通の人は中国のよくない所について言いません。でも私ははっきり言います。日本では空いている時間は全部自由でしょう。住む所も退社後も全部自分の考えで決める。中国は生活が保障されているが、自由がない」「日本はみんなの考えが個人主義・自由主義。仕事はまじめにやるが、生活は自分の好きなことができる。国家が干渉しない。外国旅行も、パスポートをとることもできる。自分で稼いだお金をどのようにでも使うことができる。中国では住む所も仕事も自由に決められない」

《農業研修生》「以前と比べて中国社会に対する見方は変わった。社会主義のいい面と言われていることは、だいたい日本にもある。日本も社会主義も同じだと思った。来日前は、日本はよくないと思っていた。社会主義中国がいいと考えていた。でも、日本にきたら日本は民主をいれた社会主義と同じだと思った。例えば来日前は、日本の老人は生活が難しいと思っていた。でも日本の老人、８０才以上の人は病院に入るのにお金がかからないことがわかった。以前は、お金がない人は入院できないと思っていた。日本にきて、中国のいろんな悪い所もわかった。何といっても民主と自由の問題。日本は、老人の生活も、民主主義で保障している」

このような彼らの認識変化は、いうまでもなく日本での研修生活体験全体の中で培われたものである(*)。ある研修生は、「研修生がもっと増えることを期待します。いろいろ外国の新しい思想をもって帰ってきて、中国人の思想が変わっていくのを促進しますから。こうして人民の思想も経済も発展

します。歴史は戻ったことはないんです」と語っている。

＊中国社会に対する研修生の認識変化については、受入側日本人、特に日常的に接触する農家によっても指摘されている。また研修生の認識変化は、受入日本人との交流の中で促進される面もある。以下は、この点に関わる受入農家の事例である。「来日前と帰国時では考え方が180度転換する。民主化運動的な、今の体制はおかしい、間違っているという意見になる。能力の発揮できる酪農にしたいとみんな言っているが、そういう体制づくりのため、社会全体の構造から変えなければならない、と。私も、自分のことだけでなく、まず言論の自由から始めろと言っている。鉄砲を撃つのではなくて。来日直後は日本の報道を間違っているという人もいるけど。確かに天安門事件のような動揺があると、それを抑えるのは仕方ないかもしれないが。いいとか悪いとか言えない。自由主義の立場で議論すると、『なるほど』という研修生と、『正しいけど中国でそんなこというと馬鹿扱いされる。体制に逆らう者は、最終的にだめになる』という人がいる」「子供の生活水準も全然違う。『ないないづくし』の話をする。なぜ日本はこんなに豊かなのか、うらやましい、と言う。中国で天安門事件が起きた。どの研修生もかなりショックを受けた。テレビ・新聞でいつでも見れる。我々が自由に政治や人を批判したりする。でもそれが中国ではできないから、自分の国に対する不安・不満がある。天安門事件のときはテレビにくぎづけになった。家族は大丈夫かという不安もあった。２カ月手紙がこなかった。政治的不安・不満は、特に28才位の人、文革後に成長した人に強い。前に研修にきた研修生は、子供を２人作ったから、職場をクビになった。３人目の子供が生まれたが戸籍に入っていない。悩んでいた。きたときは子供は２人だと言っていた。日本なら児童手当が出る。えらい違いだ。中国にいるときからかなり不満をもっている。河南省からきた人も子供は１人だと言っていたが、帰る間際に本当は３人だと言った。自衛しないと生きていけない。研修生は、なぜこんなに日本は自由にできるのだろうととまどっている。こんなので帰って、中国でうまくできるのだろうかと。帰った青年と中国で会うと『日本に行きたい』と言う。その国の人のものの考え方、外国に行って自分の国のことをよく見つめることができるように視野を広げてほしいと思う」。

また、彼らの認識変化のひとつの重要な契機として、日本のマスコミとの接触がある（表５－５）。彼らは、日本のテレビ番組の中でもニュース、特に中国に関するニュースに興味をもち、中でも天安門事件のニュースは、受入側日本人の表現によれば彼らを「テレビにくぎづけ」にした。研修生の多くは、中国には報道の自由がないこと、政府に都合の悪い事実を報道しないことを強く批判している(＊)。ある研修生は、日本のテレビで初めて学生デモのことや諸外国が天安門事件にどういう対応をとっているかを知り、「中国もこれからよくなるかもしれない、民主と平等の方向にいくかも知れない。学生デモをテレビて見てそう思った」と語っている。

＊こうした意見の事例は、以下の通りである。

《企業研修生》「情報は日本の方が早い。日本のテレビ局は個人会社で自由性があり、情報も多い。あまり厳しくない。中国ではニュースは夜30分だけで情報も厳しい。政府が責任をもっている。政府の宣伝が多い」「日本のマスコミは自由です。中国は政府の新聞なので自由じゃないです。日本はたくさん情報があって中国は少ない。日本は直接に報道できるが中国はできない。中国は、中国の状況も自由に報道できないかもしれない」「中国は、取材して内容を直してから放送する。日本は、直接、現場の内容を放送する。だから日本のニュースは速い。何時間前のことをする。新聞でもテレビでも、日本は真実、現場のことをそのまま伝える。中国は、政府が新聞を発行しているため、あることは事実ではない。あまり良くない」

《農業研修生》「日本の報道は早くて内容豊富。いきいきしている。資本主義の自由化の特性を十分示している」「日本の報道は、早くて真実を報道する。良いことも悪いことも同様に扱う。中国の報道は主に良いことだけを報じて、悪いことは殆ど報じない」「日本の報道は、いつも問題を提起して、説明する。だからはっきりしていてわかりやすい。中国の報道は一方的に話すだけで、反対意見の印象が薄い」「日本の

ニュースは国際的なニュースが多い。中国ではわからない国際情勢もわかる。日本は自由。いろいろな報道できるよ。中国は国内のこともあまりわからない」「日本は何でも話す。中国は、悪いことは少ししか話さない。日本にきてからわかった。学生デモのことなど。中国の報道は政府の政策の話。あまり外国の関係で話さない。中国への手紙には、こういうことは書かない。民主と平等。中国もこれから良くなるかもしれない。学生デモをテレビで見て思った。日本のテレビを見て、アメリカが中国政府に反対していることを知った。日本は中立。アメリカの意見は、中国では流されない。日本にいると、アメリカと日本と中国の態度がわかる。自分の国のこと、政治のこと、日本の新聞やテレビを毎日見ている。学生のデモや政治改革の問題、中国ではあまり知られていない。自分の国の悪いことあまり話さない。日本にいたら、中国のいろんなこと、いいことも悪いことも、逆によくわかる」

表5－5　マスメディアとの接触

		よく見るＴＶ番組			日中報道の比較（日本の報道の特徴）							
		ニュース	映画	その他	速報性	報道の自由	多様な情報	事実を伝える	多様な意見	不正確	国際性	その他
企業	①技術者	○				○	○					
	②技術者	○										
	③技術者	○					○					
	④個人企業主	○			○	○		○				
	⑤個人企業主	○	○			○						
	⑥管理者	○		ドラマ	○	○	○					
	⑦管理者	○	○		○	○						
	⑧管理者	○		天気予報				○				
	⑨管理者											○
	⑩管理者											
農業	①自営農民	○	○									
	②自営農民					○				○		
	③農業技術者	○		市場状況	○	○	○					
	④農業技術者	○		ドキュメント	○	○		○				
	⑤農業技術者	○				○	○				○	
	⑥農業技術者	○	○			○						
	⑦農業技術者	○				○						
	⑧農業技術者	○										
	⑨農業技術者			スポーツ								○
	⑩その他	○	○			○					○	
	⑪その他	○					○					
	⑫その他	○					○		○			

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースＮｏは表毎に不統一。

ただし、このような研修生の社会認識の変化は、単純な社会主義の否定、資本主義の礼讃ではない。前述のように、彼らは、既に日本資本主義社会の矛盾をも目の当りにしている。また彼らの中には、中国社会における「封建性の残存」、経済的基盤が未成熟な中で社会主義を建設していること、人口が膨大で国内の地域的格差が顕著であること、そして「人間関係やコネを大事にすること」等、社会主義一般の問題ではなく、特殊中国「社会主義」の諸困難として、問題を指摘する者も多い。彼らによれば、中国には、単純に資本主義に切り替えることでは解決しない問題が数多く存し、あるいは単なる上からの「社会主義の押し付け」だけでなく、民衆自身が容易に資本主義を選択しない社会的土壌が存する。確かに、日本や欧米のような資本主義社会の構築が可能であれば、彼らはそれを選択するかもしれない。しかしむしろ「中国は第3世界」と自ら規定する彼らにとって、現時点での選択肢は、従属的資本主義化の道か、それとも中国的社会主義の道かである。彼らにとって重要なことは、資本主義か、社会主義かという体制の選択ではなく、むしろ中国社会の生産力を発展させ、人民の生活を豊かにすることにある。彼らの研修も、基本的にはそのためにこそ行われているのである。もちろんこのことは現在の中国の「社会主義」路線をそのまま認めることを意味しない。中国の将来に対する研修生の見解にはかなり幅があるが、多くは、市場原理の活力を利用し、「資本主義の利点」を

取り入れ、それによって、平等や相互援助など社会主義の長所を一層発展させること、しかもそれを政治的・市民的民主主義の発展によって実現することを希望しているのである(*)。

＊中国社会の特殊性や今後の中国社会について、典型的な見解は、以下の通りである。

《企業研修生》「私は中国を愛しています。母親のような国ですから。でもいろいろ問題はありますね。社会主義といっても範囲は広いし、中国は、封建思想の影響が強いですね。長い歴史があるので、日本とは違うでしょう。日本のような社会はいいが、中国とは環境・国民性・民族性が違う」「社会主義のよい所は人間の平等。社長個人のためでなく、国のため、自分のために働く。クビになる心配がない。日本のように資本主義を経てから社会主義になるのならいいが、我々は物質的基盤ができていない。中国は封建社会から社会主義になった。マルクスが言ったのとは違う道を行っているから困難が多い。資本主義や競争を経験していないから難しい」「社会主義のいい所は男女平等、風俗や女性の地位、家族内の関係。日本は自由だが、自由すぎて、売春等、法律で禁止されていることでも実際には厳しくない。経済分野でも、市場経済は重要だが、それで解決しない問題も多い」。

《農業研修生》「中国は人間が多いし、土地も大きい。問題も多い。日本と一緒にはできない。日本よりよい所もある。中国の中でも地域毎にいろいろな違いがある。資本主義のいい所だけを学んで、社会主義にあわない所は入れないで、あう所だけ入れる」「自分にとって社会主義の発展とは何か、ますますわからなくなってきた。中国に対する見方が変わったことはある。中国は、人材を適宜配置し、技術力と資格を、人間関係やコネにかわって大事にすべきだ。そうすれば人々の積極性も高くなる。資源の合理的な開発も進めていくべき」「資本主義のいい所をもらって社会主義のいい所と組み合わせるべき。社会主義のいい所は生活水準がだいたい同じであること。本当は子供の頃から社会主義で生活してきて、資本主義はどういうものか、ここにきて初めてわかった。どっちがいいかは、今もわからない。資本主義の中の民主や平等をいれたら、社会主義はまだまだよくなると思う。中国政府の老人が全部やめたら大きく変わるかも知れない」「社会主義のいい所は、一人が困ったときみんな全部が助けてくれる。困難な者や自分に及ばない国家を助けるのは当然ではないか。私は男女平等や節約は当たり前のことだと思う。迷信の進行を禁止するのも大事だ。個人の自由は大事だが、それだけで中国の問題は解決しない」。

第２節　受入側日本人の文化変容

最後に、日本人が、中国人研修生との交流の中で、何を学んでいるのかを見ておこう（表５－６）。一般に受入企業では、研修生から学んだこと・よかったことは「特になし」が多く、今後は「希望者がいるなら受け入れてもいい」と比較的消極的である。また受入農家では、よかったことは、まず第１に「労働力的に助かる」点であり、その観点から、今後も「ぜひ受け入れたい」と考えている[2)]。総じて中国人側に比べてあまり「学んだ」点や「よかった」点が語られない(*)。

＊こうした受入側の事例は、以下の通りである。

《企業》「受け入れて失敗したということもないけど、特によかったということもない。精神的なもの以外には、中国から学ぶものは現時点では残念ながらない。今後は、要望と機会がもしあれば受け入れてもよい」「研修生から学ぶというのは特にない。労働者として受け入れるんであれば別だが、まじめに仕事するし‥。今後も受け入れる。お付き合いみたいなものもあるし、受入機関の支部役員やっていて、他に受け入れ企業が少ないという事情もあるから」「学んだことやよかったことは、はっきりいってあまりない。今後受け入れるかどうかは何とも言えない。難しい。日本語ができるといっても限界があるし、彼らは経営の勉強が目的なんだし。例えば彼らにもできる単純な仕事でよければ受け入れてもいいけれど、向こうでもそれなりの人を受け入れるとなると」

《農業》「今後も受け入れたい。人手の面では助かっていますから。研修生から学んだことはない。日本と中

表5－6　日本人側が学んだこと・よかったこと、今後の受け入れ

	学んだこと・よかったこと							今後も受け入れるか		
	民族偏見除去	国際連帯	国際偏見除去	指導力・仕事観	中国指導まじめ	忍耐成長の予	研修日本その他生の社会	労働特にせび力のなし	希望できる受け入れれば	その他・補注
	的視野	野	が身近に	協力なる蓄積	力・人間性	交流	再認識	確保		
企業①									○	
企業②	△							○	△	
企業③				△			将来の取引の可能性	○	○	
企業④							将来の取引の可能性	○	○	
企業⑤				△	△				△	
企業⑥	○							○	○	
農家①										
農家②										
農家③							日本のよさ	○	○	
農家④								○	○	
農家⑤								○	○	
農家⑥								○	○	
農家⑦				△				○	○	
農家⑧	○							○	○	
農家⑨				△				○	○	
農家⑩				△			新技術の導入	○	○	
農家⑪			○							
農家⑫										

△難しい
どうせ受け入れるなら要望に合うものにしたい
他に受入企業が少ないし、受入機関の役員だから
同じ業種の人なら受け入れてもいい
△専門が合えば受け入れてもいい
少数民族なら受け入れたい

実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースNOは表毎に不統一。

国の考え方ややり方の違いがあるから。日本に来たら日本の考え方に学んでほしい。日本に来て中国のやり方を押し付けないでほしい」「第一には労働力的に助かる。研修生から学ぶことは特にないけど、今後も1人位受け入れたい」「仕事の面では助かっている。労働を提供してもらっているから。研修生から何か学ぶということはない。今後も受け入れたい」。

しかしその中でも、いくつかの注目すべき事例も見られる。

第1は、異文化接触に伴う民族的偏見の打破と国際連帯の事例である。受入企業・農家双方で、「国際的視野をもち、中国に対する偏見がなくなった」「中国は遅れている、自分達より下だというイメージが我々の根本にあったが、その根本から変わらなければならない」と語るケースがある。また既に数年間の受入経験がある農家の中には、技術指導で中国に招かれ、家族と一緒に中国社会の実態を見る中で、娘が、「違う価値観に接することができ、世界の看護婦になって困っている国の人達を助ける」、いわば国際交流と第3世界の援助精神を学んだことを喜ぶ農家世帯主もいる（＊）。　＊民族的偏見の打破と国際連帯に関する典型事例は、以下の通りである[3]。

《企業》「社員にとって国際的なこと、他国の人間と接するのは、迎え入れる側・教える側にとってもいい勉強になった。よその国の人と接する機会をもったことの意義は大きい」「社員に国際的なことが受け入れられるようになってきた。中国に対する偏見、発展途上国で何もかも遅れているなどの認識を改めるようになった」

《農業》「我々の根本に、中国は遅れているというイメージがあった。中国人を自分達より下だと思ってい

ると、どうしても態度に出てしまう。それではうまくいかない。根本から変わらなければ。経済は日本より下だけど、人間性では下だと思っていない。そういう意味で、自分の勉強になる。87年に中国農村の視察に行った」「彼らを通じて、彼らに学んでほしいと思っている国際人としての感覚を自分ももっていられる。去年、帰国した研修生に招かれて中国に行った時、せっかくだからと小6の娘も連れて行った。かなりショックを受けたみたいだ。小学校も訪問した。生徒が教室に100人位いる。黒板も何もない。日本人を見ようと、ピョンピョンとんでいる。娘が、違う価値観の生活に接することができて良かったと思う。それ以来、娘は看護婦さんになるといってる。『通訳じゃないの』と聞くと、看護婦になって、ただ伝えるだけでなく、自分というものを表現してみたいらしい。『世界の看護婦になって、アフリカや困っている国の人達を助ける』と言っている。実現するかどうかは別にして、こういう感じをもつのは良かったと思っている」「外国人が身近になった。今まではかけ離れて近付き難かったけど、今は同じ人間としてお互いにやれるという感じがある。初めの半年間はだめだけど、その後うちとけてくる」

第2に、指導力の蓄積や仕事への取り組み方へのインパクトというメリットである。これも企業・農家の双方で指摘されている。ここでいう「指導力」とは、単に外国人に指導する際のノウハウではない。特に企業では、「人にものを教えるという雰囲気が社員の間に行き渡ってくれればいい」「『協力』を通して社員が伸びていく」等、いわば日本人従業員の職業人としての成長の一端をなす要素である。また農家でも、それは他者の人格の尊重や誠意・忍耐力等、受入側農民自身の人格の改編に関わる変化である(*)。

＊指導力・仕事の取り組み方への影響を示す事例は、以下の通りである。

《企業》「日本人にものを教えるより指導者としての経験をつませる上ではよい。長期的に考えて、人にものを教えるという雰囲気が社員の中に行き渡ってくれればよい」「外国人を入れたとき、作業そのものには足手まといになるかも知れないが、その中で作って行く成果、つまり『協力』の面がある。これが大事。社員が伸びてくれる。社内的にも精神的なメリットがある。外国人が、言葉等の障害を克服して、一生懸命勉強する姿を見る。その態度が社内にインパクトを与えるのではないか」

《農業》「自分の勉強になる。日本人を使う時より、ずっと我慢しなければならないし、尊敬しなければならない。だいたい日本人より性格が素直で汚れていない。ただし自我・プライドが高い。尊敬しないとだめ。言葉も通じないし、誠意をもっていわねば。絶対に怒らない、馬鹿にしない、プライドを傷付けないというように、日本人を使うときより我慢しなければ。中国人は、意見は意見として聞くが、感情的になったらだめだ。だから、そこをグッと我慢するかしないかで、明日からの生活が楽しくなるか地獄になるか決まる。みんなここで失敗する」

第3は、特に農家では、研修生自身の成長・変化が受入農民にとっても喜びという事例がある。帰国した研修生から多くの農家は手紙を受け取り、彼らの頑張っている姿に喜びを感じている(*)。

＊こうした事例は、以下の通りである。「帰ってから手紙をよこす子もいる。『またきっと来るから』と言ってる子もいる。その子達が向こうで酪農をやって頑張っていると思うとやっぱりうれしい」「やっぱり、研修生が日本で暮らして何ぼか進歩があったと思いますよ。機械についても一通り教えたし、長年いれば人の思いやりというのも身についてきますし。研修生は中国に帰って考え方がしっかりして伸びていると思います。人の上に立つということはうれしい。去年の研修生からたまに手紙がきます」「研修生は精神力が強くなって帰る。日本の生活はかなりきついらしい。本人達がそう言ってる。帰国して、自分の経験がいかに貴重だったかという手紙がくるし、自分の国を見直して頑張っているという手紙がくる。私が彼らと同じ年代に経験したことが、彼らにも経験できた。ある意味で恩返しかもしれないが、研修生を受け入れてよかったと思っている」

そして第４に、中国人と接する中で、逆に日本社会の矛盾・問題点を改めて認識している農民もいる。現代日本社会で「邪魔物扱い」されている農業の位置、「“おちこぼれ”だけが汚れる仕事をする」学歴社会の弊害、資源浪費・「使い捨て」の生産・生活様式、民主主義の名の下で「少数の権力者に牛耳られた」政治、食糧の海外依存や低賃金労働など「経済的に安くすめばいい」という価値観の浸透等々、多彩な問題を、彼らは再認識している。ある受入農民は、「日本では夫婦２人で150頭牛を飼える。中国なら150頭牛を飼うには100人以上が働く。初めは日本の生産性の高さが誇りだったが、よく考えると、日本では150頭牛を飼っても夫婦２人しか生活できず、しかも早朝から夜中まで働いて何千万という借金。中国なら150頭の牛を飼ったら100人以上がゆったりと生活できる。どっちが『合理的』かわからなくなった」と語っている。

＊日本社会の矛盾を再認識した受入農民の典型事例は、以下の通りである。

《農業の位置》「日本と違う面が勉強になる。今、日本では農業が邪魔物扱いされている。むしろ中国の方がいい。我々が中国にいったらかなりのことをやれると話している。逆に日本の問題を感じた。日本では夫婦２人で150頭牛を飼える。中国なら150頭牛を飼うには100人以上が働く。初めは日本の生産性の高さが誇りだったが、よく考えると、日本では150頭牛を飼っても夫婦２人しか生活できず、しかも早朝から夜中まで働いて何千万という借金。中国なら150頭の牛を飼ったら100人以上がゆったりと生活できる。どっちが『合理的』かわからなくなった」「日本は農業を二の次にしている。資材は高いし。農業のおかれている立場が一番悪い。後継者もいない。日本の農業の実態を知ってもらうことが、日本の農業の実態を変える上でも必要だ。中国は労働力があるだけに可能性が大きい。ウィグルなど未利用地もいっぱいある。アメリカ以上の経営ができる。農業は個性を出せる仕事だと思う。それが日本では魅力がなくなっていること自体がおかしい。我々が中国に行って農業やれたらいいなぁと思う。労働力が安いし、土地もある。そこに日本の技術をもっていったら、相当のことができるだろう」「日本では、農地価格は下がり、農産物価格も下がり、経営費は上がり、自分達が農業を始めてからどんどん悪くなってきている。拘束時間は長いし、見返りは少ない。多くの日本人の若者は農業に差別感こそあれ、自分でやろうとは思わない。日本に比べ、中国は農業に力を入れている。自分は、最初、中国で農業をしようと考えた。土地も労働力も安い。1000万円あればできる。もし日本に農産物を輸出できれば採算も取れる。しかし実際は検疫が難しく、１カ月以上かかる。また日本への輸出は禁じられているらしい」。

《その他》「日本は学歴社会で上をめざす。おちこぼれだけが汚れる仕事をする。事務職員・ホワイトカラーの方が上という観念がある。農協にしても、本来の目的は農家の経済的・社会的地位の向上のはずだが、今は逆になっている。職員の地位向上のために農家がある。それが日本の社会の欠点。中国は、日本よりましと思う。中国人は日本人よりまじめで、個性を伸ばせるようにすれば可能性も大きいだろう。物を大事にするし、使い捨てしない。仕事も我慢強い。日本はもう昔に戻れない。中国は技術をおぼえれば恐ろしい国になると思う。社会主義でも日本でも政治は同じだ。日本でも牛耳っている少数の権力者がいる。日本の鄧小平がいるはず。今、日本は自由社会といっても問題が多い」「今の日本の若者は、仕事に関しての感覚がどんどん我々の望みとは別の方向にいきそう。ホワイトカラーや管理職にばかりなりたがる。経済的に安くすめばそれでいい、食糧は外国から、能力のない者を安く使えばいい、つらい仕事は賃金の安い外国人にやらせればいい、そういう考えはよくないのではないか。日本人自体が、『能力のない者が畑仕事』という労働に対する考えを変えないと。日本の末端労働者をちゃんと優遇しないと日本の産業はもたない。企業管理職の給料が高すぎるから、下請や一般の人はヒーヒー言っている。一方で競争して上に行こうとする。短期的にはいいかもしれないが、長期的には食糧も労働力も自給率を高めるべき。そういう意味では日本より中国の方がまっとうな道を歩んでいる感じがする」。

《注》

（１）北海道Ａ会『研修生活』1987年度より。

（２）研修生を労働力として活用する上で、研修期間の短さがネックになっていると語る農家は多い。「５年位日本にいないと、すべてを任せられない。本当は５年位いてもらうのがベター。１～２年では覚えられない。本人達も今はもっと長くいたいと言っている」「ただ仕事というと、１年では短いです。３年間位研修ができるようにしてほしい」。また企業にも、研修生を労働力として活用できる条件が整えば、積極的に受け入れたいとするケースがある。「もっと長い期間いられるような労働力として政府が許可すれば状況は変わる。人手が足りない。技術者がほしい。技術者として１人前になるだけの時間がない。１年をすぎると、日本でも戦力になる。言葉のハンディあっても十分に通用する」。

（３） 内蒙古自治区資料・北海道Ａ会資料には、次の記述もある。「私は何度も中国に行ったことがあります。80年に私は、日本乳産量の新しい記録を作った母牛の雄の子牛２匹を上海に贈り、83年には同じものを黒竜江省に１匹贈りました。･･･85年70匹の乳牛を中国に贈り、北京に模範牧場を設立しました。87年には再び内蒙古に第二模範牧場も創立しました。今後、中国の酪農技術･･･など諸方面にも大きな発展が見られると思います。その時、私の贈った乳牛も中国の各地に広がって、北海道で研修した皆さんも各地で活躍している指導者になっていることでしょう。これは私の最大の夢です」「M氏は、内蒙古外国語培訓センターに本やLL教材を贈った」。